無断転載を禁じます。

ホ３１　なおりカミ　ミワカミのアヤ

（春日大社関係にまつる）（大神神社関係にまつる）

（初代・神武天皇 ～ ６代・孝安天皇）

ヒトのヨの初代、カンヤマトイワハレヒト、（神武天皇）

『ホツマ ツタヱ』の前篇の時代を「カミのヨ」と称しました。すなわち、大きな意味での先の世（昔）の事を意味していました。また、アマテルカミのご存世であられました時代を、敬慕しての意味も込められていました。『ホツマ ツタヱ』の前篇は、１アヤから２８アヤまでの部分です。

カンヤマトイワハレヒト（神武天皇）からは、時代が大きく変わった事と、大きな意味での今の世のこととして「ヒトのヨ」と、称するようになりました。

・

タケヒトさま（神武天皇）が、カシハラ（橿原）のミヤに、アマツヒツギ（天皇位）をしろし召されて、すでに８年目（アスス６５年）の年になりました。尊称の意をあらわす呼び名として、（初代）カンヤマトイワハレヒト（神武天皇）のスヘラギと一般にも広く認識されました。何故ならば、カミヨ（上世）の良い時代にまで戻って、統一したアマキミとしての政治体制を作り上げた、「トのヲシテ」に基づいての再構築なのでしたから、カン・ヤマ トなのです。イワハレとは、「いわわれる（祝福）」にも兼ねて地名のイワワレや、「い（こころ・意志）」が湧き立つようなの意味も込められています。「イワハレ」とは、幾つもの概念の複雑に絡み合った趣の深い言葉なのでした。

初代タケヒト（神武天皇）の、８年の年（アスス６５年）は、キアヱコヨミでのキアヱ（１）に当たります。このアキ（秋）に、コシウシロ（越後）に派遣していたタカクラシタが帰京して、タケヒトキミ（神武天皇）に報告をしました。

『トミ（わたくし、臣）は、昔、ミコトノリを拝命して全国に平定を進めてまいりました。その地域は、トクニ【四国か?】から、ツクシ（九州）のミソフ（３２アガタ）にも、またヤマカケ（山陰地方）にも巡り行きまして、最後にはコシウシロ（越後）に至りました。コシウシロのヤヒコの山辺にツチクモのような人達が、屯（たむろ）して拒むのでした。そこで、ホコを用いて５回にも及ぶ合戦の末に反乱軍は悉くに収め殺したのでした。こうして平定しましたコシウシロの２４アガタを、朝

（C）　池田　満

廷に献上します』

この故に、タケヒトキミ（神武天皇）は、タカクラシタをお褒めになって、キのクニのクニツコ（後の国造）に任じになられて、オオムラシ（大連）のカハネ（姓）も下賜されたのでした。

さて、タケヒトキミ（神武天皇）の２０年（アスス７７年）になりますと、コシウシロのクニが、ハツホ（租税）の納税拒否の運動を起こしました。そこで、タカクラシタが再び平定に向かいます。そうしましたら、コシウシロの人々は、タカクラシタがタチ（ホコ）を抜く事なしに恭順の意を表すのでした。そこで、タケヒトキミは、タカクラシタをコシウシロのクニモリに任じになられました。そして「ヤヒコカミ」の称号をヲシテに染めてお与えになられるのでした。

初代タケヒト（神武天皇）の、２４年（アスス８１年）の事でした。

タケヒトキミには、まだ、お世継ぎのお子さんが居られませんでしたので、新しくオシモメ（３段階目のおキサキさんの位）を入れることになりました。クメ（ミチオミ）の娘さんのイスキヨリヒメ（ユリヒメ）の入内（じゅだい）です。ところが、ウチミヤ（正皇后）のタタラヰソススヒメから強い拒否が出されます。トノヰ（閨に入る）が出来ないでいました。そこで、イスキヨリヒメはユリヒメと名を変えました。

そうこうする内に、キサキ（正皇后）のタタラヰソススヒメがご懐妊あそばします。そして、翌年（アスス８２年）の夏にカンヤヰミミ（イホヒト）さんが無事にご出産なされます。

タケヒトキミの２６年（アスス８３年）の冬には、また、キサキ（正皇后）のタタラヰソススヒメが皇子をお産みになられます。ヤスタレ【詳細は未詳】にお祭りのためのミユキ（行幸）での出産でした。そこで、カヌカワミミ（ヤスギネ）さんと命名されました、のちの２代目スヘラギ（綏靖天皇）に即位されるミコです。

サミヱ（２７）の年（タケヒトキミの３０年、アスス８７年）のナツ（夏）になって、ヤヒコ（タカクラシタ）がミヤコ（カシハラ・橿原）に上京してきました。そして、タケヒトキミ（神武天皇）にご機嫌伺いにご挨拶を申し上げるのでした。タケヒトキミは、ミキ（お酒）を勧めますとかなりのサカツキ（杯）が重なりました。タケヒトキミはお尋ねになります。

『昔には、お酒が強くなかったはずでしたが、今は、飲めるようになりましたね。何か訳があるのですか？』

ヤヒコ（タカクラシタ）は答えます。

『わが国のコシウシロ（越後）は寒くて、寒さ凌（しの）ぎに常に飲むようになりました。そうしましたら、段々と酒好きになってきました』

無断転載を禁じます。

これを聞いたタケヒトキミ(神武天皇)は、おっしゃいますのでした。
『ナンチ（汝）はサケ（酒）を飲むようになって、若やいできたようですね。お祝いとも言うような事で、オシモメを妻にして下さい』
このオシモメ（３段階目のキサキの位）は、先のユリヒメ（イスキヨリヒメ）さんでした。すでにヤヒコ（タカクラシタ）は７７歳になっていて、ユリヒメさんはハタチ（２０歳）です。ユリヒメさんは、コシに乗って、コシウシロのクニに嫁いで、男女一人ずつの子供を儲けました。
さて、ユリヒメさんのオシモメへの入内からの物語には、色々な出来事がありました。
初めに、タケヒトキミ（神武天皇）に見染められたのはサユカワ（率川神社・率川阿波神社　奈良市本子守町、率川坐大神神御子神社三座の所か？）にミユキ（行幸）の時の事でした。クメのヤ（家）に一泊しての行幸の際に、クメの娘のイスキヨリヒメが給仕に出ました。それを見染めたタケヒトキミは、ツケ（告げ）のミウタをお詠みになりました。

かしはらの　しけこきおやに
すがたたみ　いやさやしきて
わがふたりねん

ここに、イスキヨリヒメは宮中に上がる事になりました。ところが、ウチミヤ（正皇后）のタタラヰソススヒメにクレームを付けられてトノイ（宿直）はせずにいて、名前もユリヒメと変える事になりました。
さて、そんな状況だったユリヒメにタギシミミが思いを寄せます。タギシミコ（タギシミミ）は、タケヒトキミ（神武天皇）のご長男です。タギシミミは、一計を計ってユリヒメの父親のクメさんに同意を求めました。クメさんとしても、娘を不憫に思っていたところでしたので、娘が良いと言うなら、と答えます。そう言う経緯（いきさつ）から、ユリヒメさんは父のクメさんに呼ばれました。ここに、ユリヒメさんは何か変だと気が付くのでした。そして、タギシミミの申し出に拒否を伝えるべく、ツツウタを詠（よ）みました。

あめつつち　とりますきみと
なとさけるとめ

そこでタギシミミは、返歌を進めます。

にやおとめ　たたにあはんと
わがさけるとめ

（C）　池田　満

この、タギシミミのウタに、少しもユリヒメの表情は緩みませんでした。それで、またそのうちに。とだけ答えましたらタギシミミは去って行ったのでした。

この事件を、コトメ【別の人か？　琴を奏でる人か？　詳細は未詳】がクシミカタマに告げました。そして、クシミカタマはタケヒトキミに申し上げるのでした。

『タギシミコ様のなされました、この事は、シム（色情・血縁）のハチ（恥じ）にあたります。そっと、内輪の内緒にして置く事が望ましいのではなでしょうか』

タケヒトキミは、頷（うなず）いて同意なさいますのでした。

この経過がありましたので、ユリヒメさんはこの後の身の振り方について、ご自身も悩まれまして、またタケヒトキミも悩んでおられたのでした。そこに、７７歳とは言いましても、とても若やいできたヤヒコ（タカクラシタ）が上京して来ました。タケヒトキミ（神武天皇）は、ヤヒコにユリヒメを縁付かせることになさいました。この縁組は、全ての関係者に角が立たずに丸く収まります。あれだけの素晴らしいおウタをお詠みになられるユリヒメさんですから、おそらく、幸せをしっかりとお築きになられたことでしょう。

・

さて、サミト（２８）の年に当たる、初代タケヒト（神武天皇）の、３１年（アスス８８年）のウツキ（４月）のハツヒ（１日）に、ミユキ（行幸）をなさいました。それは、カシハラ（橿原）から西南に約４ｋｍ程行きましたワキカミ（奈良県御所市掖上）のホホマのオカでした。

タケヒトキミはホホマのオカを巡ってお登りになって見晴るかす付近の眺望を見られるのでした。おそらく、西から西南、南の方に向けてありましたでしょうか？　それは、カツラキ（カタキ、葛城盆地）に向かっての事であったと、わたくしは推察しています。そして、おっしゃいます。

『「アナニヱヤ」の7代アマカミのイサナギ・イサナミさんの国家再建に際して樹立されたのが、ウツユフ・マサキクニ【詳細は未詳】でした。カタチ（尊ぶべき所）はア（統合）・キツ（東･西）の実現での、まさに、「トのヲシテ」の精神の復活とも申せましょう。ア・キツ・シマ（締まり）と称賛されるクニの名前は、この故です。（『日本書紀』の、トンボ説は大誤訳です）

次の８代のアマテルカミは、ヤマト（東海道諸国）をご親政なされまして、ウラヤスのクニと称賛されました。また、ヲシカト（勅任の執政官）を別け使わされます。「コヱネクニ（北陸道諸国）と、ヤマト（東

海道諸国）と、ヒタカミ（東北地方）と、チタルクニ（山陰道諸国）などでした。また、１０代アマキミの弟の方のニニキネさんの時代にはシワカミ・ホツマと称えられる国の名も現れました。

オオナムチは、イツモ（出雲）の国土経営に大成功を収めまして、ミヤにタマカキ（玉垣）を巡らして「ウチミヤ」と呼ばせるほどでした。しかし、これが、後に僭越の災いにもなったのでしたが、兎に角も国土経営は大成功でした。

１０代アマキミの兄の方のホノアカリさんは、東北地方からナカクニ（今の近畿地方）への赴任に際して、イツ（伊豆）の沖から帆を上げて走る船は、あたかも空を駆け巡っているように見えました。その、イワフネ（祝い船）が、後のニキハヤヒ（養子）のミヤにと繋がったのでした』

・

初代タケヒト（神武天皇）の、４２年（アスス９９年）の正月の３日（キミヱ）に、弟のカヌナカワミミのミコトを世継ぎにと定められました。カガミのトミ（左の臣）はウサマロに、また、オオモノヌシ（右の臣）はアタツクシネが任じられました。共に、カヌカワミミさんのモロハ（両翼）のトミとして、補佐をするべしとのミコトノリです。ミケ（供えの食物）をお供えして祝います。その他のヲモチキミ（重臣）にも、共にカヌナカワミミたちを助けて補佐するべしと、タケヒトキミはおっしゃいますのでした。

タケヒトキミ（神武天皇）の７６年（アスス１３３年）の１月のモチ（満月）に、退位のミコトノリが出されました。

『吾れ（タケヒトキミ）は、既に老いたので、マツリコト（政治）から離れたいと思う。

当面は、ナオリナカトミ（左のトミ）と、オオモノヌシのオヤコ（親子）のトミに任せようと思う。左のアメタネコと、ウサマロ、それと右のクシミカタマと、アタツクシネですね。モロトミ（諸臣）はこの４人にて、ワカミヤのカヌナカワミミ（弟の、後の綏靖天皇）を立てよ』

と、タケヒトキミはおっしゃいまして、ウチミヤ（後の皇居、橿原神宮）にお篭りになられます。そして、ヤヨイ（３月）の１０日（キヤヱ）にカミ上がり（崩御）されるのでした。

・

亡きタケヒトキミのおキサキさんのアヒラツヒメと、クシミカタマ（オオモノヌシ）とがウチ（後の宮中、橿原神宮）に長く入ってモ（喪）をお勤とめになられます。タケヒトキミが生きます如くにお仕えするモ（喪）でした。

無断転載を禁じます。

さて、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロがタケヒトキミの葬送の次第を相談して準備していますと、ご長男のタギシミミが独断でマツリコトを執（と）るようになっていきました。

タギシミミの専横が明らかになりつつある事を、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロが、ワカミヤ（皇太子）のカヌナカワミミさんに告げました。しかし、カヌナカワミミさんは、父のタケヒトキミのモ（喪）を務めることがもっぱらでした。何とも指示も答えもありません。モロハノトミに任せたとのことです。つまり、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロに何とかしておいてくれ。と、モ（喪）に服するばかりでした。さらに、ミオクリ（葬送）の儀の日程についても、モロハのトミに任せたと、カヌナカワミミさんはおっしゃいますのでした。

ところが、タケヒトキミの葬送についても、タギシミミは、何のかのと、こじ付けて伸ばし伸ばしにして、一向に実現させようとしませんでした。さらに、策謀を巡らすタギシミミでした。つまり、二人の弟を暗殺しようと謀（はか）るのでした。ウネビ（畝傍）のネ（峰）のサユ（さゆり）の花見にと、ご馳走を並べてムロヤ（屋）に招くのでした。

これを知ったタタラヰソススヒメはウタの添削をと、我が子でワカミヤ（皇太子）のカヌカワミミに渡しました。イイロ（心象）を詠む歌だと言うタタライススヒメさんのウタを、カヌカワミミさんが、ウタフタ（ウタミの札）を手にとって見ますと、

さゆかわゆ　くもたちわたり
うねひやま　このはさやきぬ
かせふかんとす

うねひやま　ひるはくもとゐ
ゆふされは　かせふかんとそ
このはさやきる

の、フタウタ（2首）が染められていました。

カヌナカワミミさんは、この2首をみて、サユ（さゆり）の花見に暗殺の陰謀ありということを覚られます。そこで、兄のカンヤヰミミ（カンヤヰミコ、後のミシリツヒコ、太安万侶の祖先）に相談します。

『タギシミミさんの行状には、以前から問題が多くありました。先に、おキサキさんだったユリヒメさんを冒す事件も、改めて言えば大事件でした。親子のナサケ（情）から、内々のことに済ませて大目に

（C）　池田　満

見てもらったのでした。
ですが、今回のマツリコトに対する我が侭（まま）は、またしても酷（ひど）いものだと思います。先代スヘラギのタケヒトキミのミコトノリがありましたからには、モロハのトミに委（ゆだ）ねて、タギシミミさんはマツリコトから身を引くべきです。また、それに輪をかけて、葬送の儀の日程を延々と引き伸びさせて混乱を生じさせようとしています。
今、我ら二人を、サユ（さゆり）の花見に招くと言うのも、それは偽りで、謀殺しようとしての策謀であるようです。これには、対応せざるを得ません』
そこで、弟のカヌナカワミミと、兄のカンヤヰミミは武器を作らせることにします。ワカヒコ【詳細は未詳】にユミ（弓）を作らせます。マナウラ【詳細は未詳】にはマカコのヤシリ（矢じり）を鍛えて作らせます。そして、弟のカンヤヰミコにはユキ（弓矢入れ）を背負わせまして、カヌナカワミミさんとのアト（兄弟）でカタオカ・ムロ【現在の香芝インターチェンジの北方約３ｋｍほどのあたりか？　王寺町、片岡神社あり。詳細は未詳】に至りました。すると、寝ていたのですね、タギシミミさんは。床に伏しての昼寝のようでした。
そこで、弟のカヌカワミミさん（後の綏靖天皇）が、兄のカンヤヰミミ（後のミシリツヒコ）に言うのでした。
『ツクシ（九州）から出身の兄のタギシミミさんと、私達との間で、キシロフ（軋轢でギシギシする）のは大問題です。この状況ではモロハのトミにマツリコトを委任する事さへ出来ません。タギシミミさんとの間の軋轢は私達が解決する責務があります。
わたくしが、タギシミミさんのムロヤに入ったら、ナンチ（汝）カンヤヰミミよ、ヤ（矢）を射よ』
と、言ってムロの戸を突き開けて入って行くのでした。すると、昼寝のタギシミミは目覚めて、怒（いか）ります。
『ユキ（矢の入れ物）を負って、入って来るとは何事か！』
と、凄（すさ）まじい剣幕で言います。ここで、タジタジになって手足が竦（すく）んでしまう兄のカンヤヰミミさん（後のミシリツヒコ）でした。弟のカヌカワミミは、弓矢を引き取って矢を射ました。ひと矢をタギシミミの胸に当て、ふた矢を背に当てました。それで、タギシミミは亡くなったのでした。オモムロ（亡き骸）はカタオカ（奈良県王子町、片岡山、詳細は未詳）に納めました。
さて、肝心なときに怖気（おぢけ）付いてしまった、兄のカンヤヰミミさんは、自らが世の表舞台に居るべき器でない事を思い知りました。

それで、弟のカヌカワミミを尊んで、自らは公的な立場から身を引きます。兄のカンヤヰミミさんは名前を、イホのトミのミシリツヒコと変えてトイチ（奈良県十市郡田原本町多、多坐弥志理都比古神社）に住みます。そして、亡きタギシミミさんのお祭りをネンコロ（懇ろ）になさいますのでした。

2代・カヌカワミミ（綏靖（すいぜい）天皇）

弟のカヌカワミミさんが、ヒトのヨの2代目のヒツギの位（天皇位）を継ぎまして、ニイミヤコ（新皇居）はカタキ（カツラキ、奈良県御所市葛城）に建設する事になさいました。

さて、カツラキのタカオカのミヤにお移りになりますのは、アスス１３４年のツアヱのハル（春）の1月元旦のサナヱの日のことでした。タカオカのミヤは、奈良盆地を見遥るかす高台にあります。かなりの高所です。

そして、1月の28日にカヌカワミミ（ヤスキネ）さんは52歳で、アマツヒツギを受け継ぎになられました。カヌカワミミのアマキミと称（たた）えられて、タカオカミヤにて、ハツコヨミを公布になりました。カミヨ（上代）からの伝統のように、翌朝には、即位の際のタカミクラなどの拝観をタミにも広く公開するのでした。

また、生母のタタライソススヒメを、ミウエ・キサキとして奉ります。そして、亡き父のカンヤマトイワハレヒコ（神武天皇）のオモムロ（亡き骸）を、カシオ（畝傍山の北東、神武天皇のご陵）にて納めてお見送りをします。アヒラツヒメとクシミカタマ（ワニヒコ）が思い出話をしつつお見送りしていますうちに、タケヒト（神武天皇）の亡骸に付き添って近習のトミ（臣）達がミササキ（ご陵）の中に入って行きました。そして、その中でオイマカリ（殉死）を遂げたのでした。翌朝にこの殉死の事が人々に知らされましたらば、33人もの人がまたオイマカル（殉死）をするのでした。それ程にも、タケヒトキミは人々からお慕いされていたのでした。また、世の中の仕組みにも変化が表れて来ていたことも想像されます。

さて、この当時の世に歌われた流行りウタに、

アママミコが　アメにかえれは
ミソミ（33人）オフ（追う）　マメもミサホも

とほるアメかな

・

スヘラギ（神武以降の天皇陛下）２代目のカヌナカワミミ（綏靖天皇）の２年（アスス１３５年）のハル（春）のことでした。おキサキさんの事が定まります。

ミススヨリヒメがウチツミヤ（正皇后）になられます。ミススヨリヒメさんはクシミカタマの娘でして、母はミラヒメさんでした。アタツ・クシネの妹（姉？）さんですね。また、シギ（磯城郡）のクロハヤのカワマタヒメをオオスケキサキになさいます。クロハヤはおそらくはオトシギの子孫でありましょう。また、アタ【詳細は未詳】の娘のアタオリヒメはスケキサキになります。カスガのアフエのモロ（アフエモロ）の娘のイトオリヒメはココタヱになります。ココタヱはミコの指導にもあたり、ナガハシ（後の長橋）のヲシテを司どる重要な役目の任です。カダキ（カツラキ、葛城）のクニツコ（後の国造）のツルギネの娘のカツラヒメは、ウチキサキになります。その妹のカツラヨリヒメはシモキサキになります。また、アメトミの娘のキサヒメもシモキサキになります。この他に３０人のおキサキさんがおいでになりました。

２代カヌナカワミミ（綏靖天皇）の、２年（アスス１３５年）のハツキ（８月）ハツヒ（一日）に、カヌカワミミ（綏靖天皇）さんはミコトノリを発せられます。

『昔に聞いたことがありました。それは、ワニヒコ（クシミカタマ）の祖先からのマメ（忠節）のことです。

ソサノヲさんの子だったオオナムチは、イツモ（イズモ、出雲）の国土経営の大成功と、ツカルへのクニ遷しの後にもまた大成功を収めました。コト（功績）為し終えての満足を言った時、ミモロカミ（クシヒコ、２代目オオモノヌシ）が海原に光り現われてまたイサメ（心を覚めさせる、諌め）言うのでした。「わたくしが在りてこそ、おおよそに為すことをせしめることが出来たのでした」と、クシヒコのミタマは言うのですね。クシヒコこそ、「サキミタマ」と言えるのでしょう。

また、時代が下ってワニヒコ（クシミカタマ）は、大きな功績からすれば「ワサタマ」と言えましょう。チチキミ（タケヒト・神武天皇）のヤマト討ちの時代の混乱を上手くサポートしてくれた功績はとても大きいものでした。

また、みたび【三度か？　詳細は未詳】巡っての功績と言えます。ひとり時代が分かれ下ったワニヒコ（クシミカタマ）までが「ミワのカミ」

であると讃えたいと思います。のちの子孫代々にわたっても、世々のスヘラギ（神武以降の天皇陛下）の護りを為してください』

ナカツキ（アスス１３５年、９月）１１日に、カヌカワミミ（綏靖天皇）さんは、ミワのカミをお祭りなさいますのでした。（大神神社）そして、当代のアタツ・クシネ（クシミカタマの子）に、オオミワのカハネ（姓）を賜うのでした。この時、ワニヒコ（クシミカタマ）は１９２歳で栄誉の祭典に臨むのでした。

・

さて、時（３年か？）にツクシ（九州）から、ミユキ（行幸）を求める声が上がって来ました。カヌカワミミ（綏靖天皇）さんは、代理を下される事になさいました。そのご名代にはナオリナカトミ(アメタネコ)が任じられました。アメタネコは、タケヒトさんの九州下りの際に守り役として付き添った経緯もありました。真っ先にナオリナカトミの赴いた先は、トヨ（豊前・豊後、今の福岡県と大分県にほぼ匹敵）のクニでした。ナオリの地域（現在の大分県竹田市（たけた）直入、大分県由布市庄内町阿蘇野には、直入中臣神社がある）に、ナオリナカトミ（アメタネコ）が赴いた際に、九州全土からのミソフ（３２、九州全土の３２の地域）のヌシの人々が集まり、ノリ（定め）を受けて動揺が定まったのでした。

先の事でしたが、この年にはサミタレ（梅雨）が６０日にも渡って降り続いたのでした。サナエ（稲）は病気になってミモチ（イモチ病）に傷みました。これを告げる九州の人々からの窮状によって、ナオリナカトミ(アメタネコ)が使わされたのでした。イネ（稲）のナオリ（直り）を祈るハラヒ・カセフの祭りを為したのでした。ナオリナカトミ（アメタネコ）はじめミソフ（３２）の九州のヌシらが一心に祭りを努めて、イネも直ってきました。アキ（秋）には実りも充実しました。そこでホツミ（豊作）の祝いの祭りをするのでした。この事を始まりとして、タミのウフスナ【現代語の産土とは意味が違うようです。詳細は未詳】として、スミヨシと、モノヌシ（オオモノヌシ）と、ナカトミを合わせてナオリカミとして祭る事になりました。

ウサ（宇佐神宮）にイトウのミメカミ（３ヒメミコ、タケコ・タキコ・タナコ）を祭ります。また、アマキミ（２代スヘラギ・カヌカワミミ）は、ヒコユキを祭りのヲミ（臣）のスケ（副臣）として任命したのでした【ヒコユキのこと、詳細は未詳】。

・

２代スヘラギ・カヌカワミミの、４年（アスス１３７年）のことでした。サヤヱの年でして、ウツキ（４月）にイホヒトさんがお亡くなりに

なりました。イホヒトさんは、カヌカワミミさんのお兄さんです。ミシリツヒコとして名乗っておられたのでした。（後の子孫が多氏、『古事記』の太安万侶が出ます）

・

２代カヌナカワミミ（綏靖天皇）の、５年（アスス１３６年）のサヤトの年のナカツキ（９月）のモチ（満月）にミコ（皇子）が誕生します。ウチミヤ（正皇后）のミススヨリヒメがお産みになったタマテミ（シギヒト）さんでした。後に３代スヘラギ（安寧天皇）を継がれます。この翌年の６年のネシヱの年のフユ（冬）には、オシモメ（第三位目のキサキ）のイトオリヒメがミコ（皇子）のイキシミコをお産みになりまして、スケキサキ（第二位目のキサキ）に上がられます。

２代スヘラギ・カヌカワミミの２５年（アスス１５８年）のサアトの年に、ヨツギ（世継ぎ）の決定がなされます。ムツキ（１月）３日の事でした。２５歳のシキヒトさんを次代のお世継ぎとお定めになったのでした。

・

この年（２５年）のシモツキ（１１月）の１４日に、アメタネコが亡くなりました。アメタネコは、１８７歳でした。オモムロ（亡き骸）はミカサヤマに納めます。そして、カスガのトノ（春日大社）に併せて祭ることにします。ミカサのカハネ（姓）は嫡子のウサマロに継がせました。そして、ウサマロは、ミカサヲミとして尊称される事になります。

・

２代スヘラギ・カヌカワミミの３６年（アスス１６９年）のサツキ（５月）１０日に、スヘラギがお亡くなりになりました。２代スヘラギ・カヌカワミミさんは８４歳（８７歳が正しいか？）でした。ワカミヤ（皇太子）のシギヒトさんは、この夜からモ（喪）に服することになさいます。そして４８日のモ（喪）が過ぎまして、イサカワ（率川神社か？）にミソギ（禊ぎ）をなさいます。チのワの潜（くぐ）り祓いをされてから、ミヤ（政庁）にお出ましになられるのでした。先のカヌカワミミさんにお仕えしていた近習のトミ（臣）達は、亡きスヘラギのミタマを祭る事に専念します。そして、皇太子シギヒトさんに仕えるトミ達と、入れ替えになって３代目スヘラギを支えてゆきます。

３代・タマテミ（安寧天皇）

時はアススの１７０年のネアト（５０）の年の事でした。３代目スヘラギのタマテミ（シギヒト）の即位が執（と）り行われます。シギヒトさんは、３３歳でアマツヒツキ（天皇位）を受け継がれます。そしてタマテミのアメのスヘラキミとして３代目スヘラギを名乗られるのでした。

シギヒトさんの誕生の時の話がありました。チチキミ（２代カヌカワミミ）が、ココナ（菊）の花見をしようと、シギのクロハヤのタチ（屋敷）に行幸なさいました。この際に、ミススヨリヒメ（正皇后）とカワマタヒメ（オオスケキサキ）をお連れになられたのでした。さて、ミススヨリヒメはここで、産気付かれました、が三日間お辛くて病がちになられます。そこに、メヲ【女性と男性、男性はタマてヒコ、夫婦か？ 】が尋ねてきて助力を申し出るのでした。キミ（２代カヌカワミミ）はタマテヒコに手助けを頼みます。そうして、無事にミコ（皇子）を出産出来たのでした。タマテヒコの手助けが良かったのでした。キミ（２代カヌカワミミ）もホッとなさいますのでした。ご出産なさいました朝に、シキのクロハヤのタチ（舘）に朝日が輝いていました。そこで、タマテミがイミナ（実名）を「シギヒトさんにしては如何でしょうか？」と薦（すす）めました。キミ（２代カヌカワミミ）も、良しとなさいまして、ミススヨリヒメ（正皇后）のお産みになったミコはシギヒトと名付けられたのでした。また、タマテヒコの事をお褒めになろうとなさいまして、カハネ（姓）を問われになりました。タマテヒコはコモリの子孫だと言います。また、女性のほうはカツテの子孫だと答えました。そこで、ワカミヤのウシ、モリのカミと褒め名を与えになりました。さらに、コモリとカツテの祖先祭りをヨシノ(吉野)にすることになさったのでした。現在にも、吉野水分神社（子守神社）、勝手神社（焼失中）、として共に吉野山に祭られています。（『延喜式』にも記載の古社）

・

さて、シギヒトさんは、３代目スヘラギのタマテミとして即位をなさいました。母のミススヨリヒメをミウエキサキとして尊重なさいました。この事などから、シギヒトさんは、イミナ（実名・まことな）もお呼び名もシギヒトさんと申し上げるのでした。

アスス１７０年カンナツキ（１０月）の１１日に、先代の２代目スヘラギ・カヌカワミミ（綏靖天皇）のオモムロ（亡き骸）を、ツキタオカ（桃花鳥田丘上陵、橿原市四条町、畝傍山の北東辺、トキ（朱鷺との関係は？　ツキタを何故？　桃花鳥と漢訳したのか？）にお納めします。

アススの１７１年のキミヱ（５１）の年に、新ミヤコにお遷りになります。新ミヤコはカタシホのウキアナ（大和高田市片塩町・石園坐多久

虫玉神社（いはその・いその、虫は豆が本意か？　たくつ）『延喜式』記載あり、が有力な現在地か？）に定まりました。畝傍山と、二上山との中間に位置します。

アススの１７２年のキミト（５２）の年ハツ（１月）に、キサキの事が定まります。ウチツミヤ（正皇后）にはヌナソヒメがお立ちになります。ヌナソヒメは、アタツ・クシネの子のオウエモロ（アフヱモロ）がヌナタケを娶って産まれた娘さんでした。兄にイイカツも産まれています。

シギのハエの娘さんのカワツヒメをスケキサキ（第一位のキサキ）になさいます。

また、これより先に、アウヱモロの子のオオマが儲けたイトヰヒメをナガハシ（ヲシテを司る、長橋）のキサキになさっていました。イトヰヒメは、イロキネのミコ（皇子）をお産みになります。イロキネさんは、トコネツヒコと名乗ります。このイロキネさんの誕生があったので、イトヰヒメはオオスケキサキに上がられるのでした。

また、カワツヒメもミコ（皇子）のハチキネさんをお産みになります。ハチキネさんは、シキネツヒコと呼ばれる事になります。

３代タマテミ（安寧天皇）の、４年（アスス１７３年）のツヤヱ（５３）の年に、ウチミヤ（正皇后）のヌナソヒメがミコのヨシヒトさんをお産みになります。ウツキ（４月）１５日のことでした。ヨシヒトのミコは、後に４代目スヘラギ（懿徳天皇、うるわしい・良い・精神的な能力）に即位なさいまして、オオヤマトヒコ・スキトモと名乗られます。

・

この年に諸臣の累進が定められます。タケイイカツ（イイカツ、ヌナソヒメの兄）と、イツモシコ（ウマシマチの４代目の子孫）がケクニトミ（重臣、ホ 31-70、ホ 31-85、ホ 31-89、ホ 32-36、ホ 36-17）に任じられます。また、オオネトミ【詳細は未詳】は、イワイヌシに任じられました。

３代スヘラギ・タマテミの６年（アスス１７５年）のムツキ（１月）１１日に、ヌナソヒメさんはお二人目のミコのトギヒコさんをお産みになります。トギヒコさんは、クシトモセと名乗ります。

３代スヘラギ・タマテミ（安寧天皇）の１１年（アスス１８０年）ハツミカ（１月３日）に、ヨツギミコ（お世継ぎ）をお定めになられます。ヨツギミコは、この時８歳のヨシヒトさんでして、後に４代目スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）にとなられます。

３代スヘラギ・タマテミ（安寧天皇）の３８年（アスス２０７年）のサミヱ（２７）の年の、シハス（１２月）６日に、タマテミさんが崩御

なさいました。御齢７０歳のことでした。ワカミヤのヨシヒト（スキトモ）さんは４８日のモ（喪）を務められますので、正月のコトホキ（お祝い）の行事もしない事になりました。４８日間のモ（喪）を終えられました後、イサカワ（率川神社か？）にミソギをなさいましてから、ミヤにお出ましになられますのでした。

また、先代のスヘラギに近くお仕えしていたトミ（臣）を、ウキアナのカミ（３代タマテミ）をお祭りするために専念させまして、おわします（ご生前の）如くに仕えさせるのでした。この年のアキ（秋）ホツミ（８月）には、タマテミさんの亡き骸を、畝傍山の西南のミホト（橿原市吉田町、御陰井上陵）に送り納めました。

４代・スキトモ、（懿徳天皇）

時はアスス２０８年のサミト（２８）の年の事でした。４代スヘラギのスキトモさんがご即位なさいます。キサラキ（２月）４日のネアヱ（４９）の日に、ワカミヤのヨシヒトさんが３６歳でアマツヒツキ（天皇位）を受け継がれまして、オオヤマトヒコ・スキトモのアメスヘラギと称（たた）えられます。ニニキネさんからの伝統のアメのノリを以って、人々に拝ませるのでした。新ミヤコはカルのマカリオ（軽 曲峡宮、橿原市久米町）に建てられました。そして、マカリオのミヤのコヨミをこの年に始められます。

この年、４代スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）の元年ホツミ（８月）ハヒ（１日）。先代スヘラギのタマテミさん（安寧天皇）の亡き骸を、畝傍山の西南のミホト（橿原市吉田町、御陰井上陵）に送り納めました。この日と、シワス（１２月）の６日（一周忌に相当します）には、モハ（喪服）を召されるのでした。

ナカツキ（９月）の１３日に、スキトモさん（懿徳天皇）のご生母のヌナソヒメをミウエキサキとなさいます。

４代スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）の２年（アスス２０９年）のムツキ（１月）の５日に、ニイミヤコ（新皇居）のカルのマカリオ（軽 曲峡宮、橿原市久米町）にお遷りになりました。そして、次の月のキサラキ（２月）の１１日に、ウチミヤ（正皇后）としてアメトヨツヒメさんが立たれるのでした。

シギのヰテの娘のヰツミヒメがスケキサキ（第１位のキサキ）になられます。また、アウヱモロの孫のフトマワカの娘のイイヒメをココタエ

のキサキとなさいました。

４代スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）の5年（アスス212年）のヤヨイ（3月）のユミツキ（7日ぐらい）に、スミエ（住吉神社、大阪市住吉）にミユキ（行幸）をなさいました。スミエの海岸でミル（海藻、海松）を見られるのでした。そこで、ウチミヤ（正皇后）のアメトヨツヒメがミコ（皇子）をお産みになりましたので、ミルヒトさんと名付けられたのでした。ウチミヤ（正皇后）のアメトヨツヒメの父親のイキシミコを、ヲキミ（重要なトミ（臣））に任じられるのでした。

また、イイヒメはタケアシ【詳細は未詳】にお産みになられたミコは、タチマミコでしてイミナ（実名）をタケシヰさんと名付けられました。

・

４代スキトモ（懿徳天皇）の、22年（アスス229年）のキサラキ（2月）ツシト（44）の年の、ハツ（1月）の12日に、カヱシネのミコ（皇子）を世継ぎとして定めになられました。カヱシネ（ミルヒト）さんは、18歳の事でした。

４代スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）の34年（アスス241年）に、カヱシネさんは崩御なさいました。ナカツキ（9月）の8日の事でした。ワカミヤのカヱシネ（ミルヒト）さんは、亡き父上にもっぱらに仕えようとなさいまして、モ（喪）のハ（衣服）をヒトセ（1年間）までお召しになられたのでした。そして、ミアエ（お食事）を、生きます如くに捧げてお仕えなさいました。ようやく、翌年のフユ（冬）のアスス242年に、畝傍山の南のマナコタニ（橿原市西池尻町）に、スキトモさんのオモムロ（亡き骸）をお送りするのでした。スキトモさんは69歳でお亡くなりになられたのでしたが、翌年のモ（喪）の1年を足して、70の世としてお送りするのでした。

5代・カヱシネ（孝昭天皇）

５代スヘラギのカヱシネさんは、カタキ（カツラキ）のヰケココロの新ミヤ（御所市池之内か？）に、ミヤコ（首都）をお移しになられました。そして、ヰケココロのコヨミを此処に始められます。アスス234年でして、カヱシネさんの31歳の時の事でした。

５代スヘラギのカヱシネ（孝昭天皇）さんの初年に、イツシココロをケクニトミ（重臣）に任じになりました。

サカイオカ【詳細は未詳】

さて、昔、カヱシネさんがワカミヤ（皇太子）であった時からの事でした。

ワカハヱの娘のヌナキヒメをスケの位置になさっておられました。また、サタヒコ【詳細は未詳】の娘のオオヰヒメはナカハシ（のちの長橋）の位置に任じて、ヲシテを扱う事を任せておられました。カリスケとしての位でした。この他にウチハヘ【ウチキサキと、同位置か？　詳細は未詳】として６人、また、シモ（オシモメ）４人。アオメは３０人おられました。

５代カヱシネ（孝昭天皇）さんの、２９年（アスス２７１年）に、キサキが定まります。ウチミヤ（正皇后）には、ヨソタリヒメが選ばれました。ヨソタリヒメは、１５歳でした。この、ヨソタリヒメは、昔、ヤヒコ（タカクラシタ）にユリヒメを賜りて産まれたアメヰタキの、子がアメオシオでして、アメオシオの孫娘にあたるのがヨソタリヒメです。ヨソタリヒメの兄のヨソタリは３１歳でして、ウチミヤの兄として、カヱシネさんにお仕えします。オキツヨソとしてケクニトミ（重臣）に任じられます。

５代スヘラギ・カヱシネ（孝昭天皇）の４５年の、サツキ（５月）の１５日に、正皇后のヨソタリヒメがオシギネのミコ（皇子）をお産みになりました。オシキネは、アメタラシヒコクニのミコと呼ばれます（後のカスガ・ヲキミ）。

また、５代スヘラギのカヱシネ（孝昭天皇）さんの４９年（アスス２９１年）のキミヱの年のハツヒ（１月元旦）に、ヨソタリヒメはオシヒトさんをお産みになります。オシヒトさんは、後に６代目スヘラギを継ぐヤマトタリヒコクニのミコ（孝安天皇）です。オシヒトさんの誕生の朝、朝日がとても美しく輝いたと伝えられています。

５代スヘラギのカヱシネ(孝昭天皇)さんの６８年(アスス３１０年)のムツキ（１月）１４日に、オシヒトさんをワカミヤ（皇太子）となさいました。オシキネは、ハタチ（２０歳）での事でした。翌日の１５日には、兄のオシキネをヲキミ（準皇太子）に定めたまわり、カスガの称号を授与なさいますのでした。

・

５代スヘラギのカヱシネ(孝昭天皇)さんの８３年(アスス３２５年)のアキ（秋）のハツキ（８月）５日に、カヱシネ（孝昭天皇）さんが崩御なさいました。時に、１１３歳の事でした。トミ（臣）もキサキも、そのままに亡きカヱシネさんにお仕え申し上げるのでした。ミコのオシヒトさんは、亡き父君に仕えると共に、タミを治めますのでした。

無断転載を禁じます。

その良きさまを見た兄のオシキネさん（カスガ・ヲキミ）は、弟のオシヒトのキミ（皇太子）に忠節を誓います。さらに、オシキネさんの子孫のソトミ（１０氏）も忠節にいとまなく仕えるのでした。その１０氏は、オオヤケ、アワタ、オノ、カキモト、イチシ、などでした。（『古事記』は、１０氏の全部を載せる）

そして、タリヒコクニ（５代スヘラギ・孝安天皇）のキミは、毎年、ハツキ（８月）５日から、８日間のモ（喪）をお祭りして父君を偲んでおられるのでした。まさに、マコトなるかな、の事々です。

６代タリヒコクニ（孝安天皇）

時はアススの３２６年の事でした。弟のオシヒトのミコが、アマツヒツキ（天皇位）を受け継がれて６代スヘラギのタリヒコクニとして即位なさいます。ハツ（１月）ソカ（１０日）の事でした。オシヒトさんは、即位の式典の翌朝に、前例どおりに、カサリ（即位の儀式の設え）をタミに拝ませるのでした。

そして、キサキの次第を定められます。

シギのナカハヱの娘のナカヒメをオオスケキサキとなさいました。トチヰサカヒコの娘のヰサカヒメは、ウチキサキで、ナカハシ（後の長橋）に位置してヲシテを司る役目になさいました。この他のキサキ達もあわせて、すべて１２人おられました。

６代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の２年（アスス３２７年）のフユ（冬）に、ニイミヤコ（新首都）のムロのアキツシマ（御所市室）に移られるのでした。

６代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の１１年（アスス３３６年）に、天候異変のムレクモ（日差しが少ない）が起きて、稲穂に虫が大発生するのでした。この知らせを聞かれたタリヒコクニさんは、おん自らにハラヒのカセフ（風を起こして払う）の祭りをおこなわれました。この故に、イネ（稲）も蘇（よみが）えりまして、ミツホ（租税）も納められる程になりました。ホツミの祭りを執り行うのでした。

６代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の２６年（アスス 351 年）のキサラキ（２月）の１４日に、オシヒメさんをウチミヤ（正皇后）に入れられました。オシヒメさんは、カスガヲキミ（５代カヱシネ（孝昭）の兄、オシキネ）の娘さんで、この時１３歳でした。

（C）　池田　満

先代のお亡くなりの３３年の後、つまり、アスス３５６年の、ハツキ（８月）１４日に、先代の５代目カヱシネ（孝昭）さんのオモムロ（亡き骸）をハカタのホラ（御所市三室、掖上博多山上陵）に納めます。近習のトミ(臣)やおキサキさん達の亡き骸も、一緒に納めました。また、この時に残っていた３人は、アメミコノリ（神武天皇の故事）に拠りオヒマカリをしたのでした。

６代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の５１年（アスス 376 年）の、ナカツキ（９月）のハツヒ（１日）にキサキ（正皇后）のオシヒメさんが、ネコヒコのミコをお産みになります。ネコヒコさんは、オオヤマト・フトニのミコ（孝霊天皇）と呼ばれて後に７代スヘラギを継がれます。

６代タリヒコクニ(孝安天皇)の、７６年(アスス 401 年)、ハル(春)のムツキ（１月）の５日に、フトニ（ネコヒコ）さんがヨツギミコ（皇太子）に定められます。フトニさんは２６歳の事でした。

６代タリヒコクニ（孝安天皇）の、９２年（アスス 417 年）に、スルガのミヤ（ハラミ）からハラミのヱ（富士山の絵）が献上されてきました。ミコ（皇太子）のフトニさん（４２歳）は、誉めるようにと推薦するのでしたが、タリヒコクニ（孝安）さんはさほどにもお感じにはなられませんでした。

６代タリヒコクニ（孝安天皇）の、１０２年（アスス 427 年）のムツキ（１月）５日に、キミ（孝安）は崩御なさいました。１３７歳でした。

ミコのフトニさんはモ（喪）を務められます。そして４８日の後にワカミヤ（皇太子のミヤ）にお出ましになります。ナカツキ（９月）５日に、オモムロ（亡き骸）をタマテ（御所市玉手、玉手丘上陵）にお納めします。この時に５人の人がオヒマカリをしまして、共にタマテのミササキ（陵墓）に納めるのでした。アキツカミとして称（たた）えるのでした。アキツとは７代アマカミのイサナギ・イサナミさんのご治世を讃えた呼び名でした。（念のために、添えます。アキツとはトンボの事では断じてあり得ません。トンボは、誤訳の極みと申せます。漢字文への翻訳で『日本書紀』は大きな罪作りをしたものです）

・

此れより以下に、ホ３１‐８のタケヒトさんのご宣言の解説を、再度掲げます。とても、重要な「みことのり」であるためです。

ホホマのオカでのご宣言です。

『「アナニヱヤ」の7代アマカミのイサナギ・イサナミさんの国家再建に際して樹立されたのが、ウツユフ・マサキクニ【詳細は未詳】でした。カタチ（尊ぶべき所）はア（統合）・キツ（東・西）の実現での、まさに、「トのヲシテ」の精神の復活とも申せましょう。ア・キツ・シマ（締まり）と称賛されるクニの名前は、この故です。

次の8代のアマテルカミは、ヤマト（東海道諸国）をご親政なされまして、ウラヤスのクニと称賛されました。また、ヲシカト（勅任の執政官）を別け使わして、コヱネクニ（北陸道諸国）と、ヤマト（東海道諸国）と、ヒタカミ（東北地方）と、チタルクニ（山陰道諸国）などでした。また、10代アマキミの弟の方のニニキネさんの時代にはシワカミ・ホツマと称えられる国の名も現れました。

オオナムチは、イツモ（出雲）の国土経営に大成功を収めまして、ミヤにタマカキ（玉垣）を巡らして「ウチミヤ」と呼ばせるほどでした。しかし、これが、後に僭越の災いにもなったのでしたが、兎に角も国土経営は大成功でした。

10代アマキミの兄の方のホノアカリさんは、東北地方からナカクニ（今の近畿地方）への赴任に際して、イツ（伊豆）の沖から帆を上げて走る船は、あたかも空を駆け巡っているように見えました。その、イワフネ（祝い船）が、後のニキハヤヒ（養子）のミヤにと繋がったのでした』

無断転載を禁じます。

ホ３２　フジとアワウミ ミツ の アヤ

富士山　琵　琶　湖　（貴い）

― 7代・孝霊天皇～8代・孝元天皇～9代・開化天皇 ―

7代・ヤマトフトニ（孝霊天皇）

時は、アススの４２８年の1月１２日のことでした。七代目スヘラギのヤマトフトニ（孝霊天皇）さんは、アマツヒツキ（天皇位）を受け継がれましてご即位あそばされました。ヤマトフトニのアマツキミのイミナ（実名）はネコヒコさんです。

ネコヒコさんは、諸臣と合議のうえ、アメのミマコの十代アマキミの弟の方のニニキネさんの、即位の式典の式次第に則（のっと）って、即位に臨まれました。そして、伝統の通りに、翌日には一般国民に即位の式典の会場を公開なさいますのでした。

そして、ご生母のオシヒメさん（五代カアシネ、孝昭天皇のミコのカスガヲキミの娘さん）をミウエキサキとして奉り敬います。

昨年の、アススの４２７年の１２月４日にクロタのイホトミヤ（奈良県磯城郡田原本町黒田）にミヤコ（皇居）をお移しになられまして、アススの４２８年からハツコヨミを始められました。

フトニのキミの2年（アススの４２９年）キサラキ（2月）１２日に、キサキを定められました。シキのオオメの娘のホソヒメさんがウチミヤ（正皇后）になられました。また、カスガヲキミの子のチチハヤの娘のヤマカヒメがスケキサキになられます。また、トイチのマソヲの娘のマシタヒメはココタエの位になさいました。この他にウチキサキはお四方と、また、オシモメもお四方入れられました。

３年（アススの４３０年）のハル（春）に、オオミナクチとオオヤクチの二人を共にスクネの位を授与なさいました。

同じ年の、ナツ（夏）には、ウチメの位だったヤマトクニカヒメが三つ子を産みました。三人ともヤマトの名を冠しまして、長女はヤマトモモソヒメです。長男はヤマトヰサセリヒコです。次女は、ヤマトワカヤヒメです。そして、生母のクニカヒメを、ヤマトのオオミヤメとして称（たた）えました。

１１年（アススの４３８年）フユ(冬）には、クニカヒメの妹のハエヒメをウチキサキになさいます。そうしましたら、１３年（アススの４４０年）のシハス（１２月）１日に、ハエヒメも三つ子をお産みになったの

（C）　池田　満

でした。男の子ばかりの三つ子で、1男はヱワカタケヒコ、2男はヒコサシマ、3男はトワカタケヒコと名付けられました。生母のハエヒメはワカオオミヤメとして尊称が付けられました。

七代ヤマトフトニ（孝霊天皇）の、２０年（アスス４３７年）の1月モチ（望月）に、ウチミヤ(正皇后）のホソヒメさんがミコのヤマトネコヒコ・クニクルさん（イミナはモトキネ、後の八代孝元天皇）をお産みになりました。

２５年（アスス４４２年）の、1月11日の年中行事になっていたアカタヌシを召してのモノを賜う際（のちの徐目）に、ミコトノリを御出しになりました。フトニのスヘラギ（孝霊天皇）はおっしゃいます。

『もしも、三つ子を一孕みで産む事があれば、ミカド（朝廷）に告げ知らせなさい。必ず、褒めて賜りものをつかわすことにします。

この理由は、生まれ出でたるイノチ（生命）を大切にするためです。はるか昔、アマテルカミのみ孫の、十代アマキミのニニキネさんは、おキサキさんのコノハナサクヤヒメとの間に三つ子を儲けられました。それから、ずっと三つ子の誕生を聞いた事がありませんでした。今、私が三つ子を儲けました。ここで、ほのかに聞くところでは、「間引く」と言って赤ん坊を殺してしまうような事があるとも。それは、いけないことです。今より後に、「間引き」がおこなわれてはなりません。今後は、「間引き」をすれば罪人として扱います。

我が子とは言いましても、ヒトは「アメ（宇宙の中心）」からタネ（タマ）の降されて来た尊いものなのです。

ヒトの尊さを言うノリ（言葉）に、

「シカ・イヌ、チ（１０００）より、ヒトひとり」

といいます。これは、タケミナカタのノリ（定め）です』

こうして、フトニのスヘラギ（7代孝霊天皇）は人命尊重のミコトノリを発っせられました。クニのツカサ（司）達は、国民に触れ知らせるために帰国の途につくのでした。

翌日の２５年(アスス４４２年)1月12日の朝に、スワのハフリ(タケミナカタの子孫)が、ハラヤマ(富士山)のヱ(絵)を献上しました。また、同時にシラヒケカミの子孫のアメミカケは、アワウミ（琵琶湖）のヱ（絵）を奉ってきました。フトニのキミは、大変面白い事だと、褒美を沢山授与なさいました。

程なくある日、フトニのキミはカスガにおっしゃいますのでした。

『われ、昔、この絵を見たのでしたが、合わせ考える事を十分にしなかったために、「タ（良い政りこと）」を為し得ませんでした』

それは、六代タリヒコクニ（孝安天皇）の９２年（アスス４１７年）

のことに遡ります。

「スルガミヤのハフリが　ハラのヱ（絵）をたてまつる（献上）
ミコ（後の八代フトニさん、孝霊天皇）申せとも　キミ（七代タリヒコクニ、孝安天皇）受けず」（『ホツマツタヱ』３１-１０２）

その時に、父君のタリヒコクニさんに、強く主張し得なかったのでした。アワウミ(琵琶湖）と、ハラミヤマ(富士山）との関係性について、まだ、思い至たらなったからでした。そして、フトニのキミ(孝霊天皇）はおっしゃいますのでした。

『今、このヤマ・サワ（富士山と琵琶湖）のヱ（絵）をあわせて見ることは、ワリフタ（割り符だ）を合わせるようです。とても良い前兆であるかのようにも思えます。ハラミのヤマ(富士山）の良き草（長寿の薬草のチヨミクサ）が、５００年前に噴火によって絶滅してしまっていました。ニオウミ（琵琶湖）がヤマ（富士山）を潤すと、タネが生じるかも知れません。再びチヨミルクサの再び生えてくる事を期待します』

こうして、フトニのキミはふたつの絵を楽しみになられるのでした。

七代ヤマトフトニ（孝霊天皇）の、３６年（アスス４６３年）の１月１１日にモトキネをヨツギとして定められます。フトニのキミは、み手ずからミハタオリトメをお授けになります。「カクのフミ」の最終章のアヤがミハタオリトメです。そして、おっしゃいますのでした。

『これはアマカミのヲシテ（オシテ）であります。朝にタに眺めて、よくよくその精神を感じ取ってください。そして、実情を良く考え合わせてタミ(国民）を教え導いて治めてください』

ミハタオリトメを賜ったモトキネは、翌朝に、タミ(国民）に立太子の位の就任の儀式の設えを拝ませるのでした。

ヤヨイ(３月）の中ほどになりまして、前のスヘラギのフトニさんは、ハラミヤマ（富士山)へと行幸なさいます。チヨミルクサの再生が起きているかも知れません。是非とも、尋ね見てみたい、と、思し召されたのでした。

ハラミヤマへの道は、クロダ（奈良県磯城郡田原本町、黒田）から、カグヤマ（飛鳥）へと、そして、カモ（京都、下鴨神社、上賀茂神社)、タガのミヤ（多賀大社）を経まして、スワ（諏訪）からサカオリに至ります。ここに、タケヒテルはミアヱ（ご馳走）を用意してお待ちしていました。これから、ハラミヤマ（富士山）の山頂に登山をなさいます。スバシリに下山をなさいまして、裾野を巡られて、ムメオオミヤ（浅間大社）にお入りになりました。ここに、カスガが教えを請います。

『ミネ(富士山中)に得ました三葉のアヤクサ(珍しくそれらしい草）は、チヨミクサで御座いましょうか？

諸ヒト（人）が試食しようと、煮ましたが、余りにも苦いので、誰も食べ得ないでいます』

フトニのキミも、感じ入られておっしゃいます。

『ナカミネ（宇宙のアモト）のアテ（地球上での相当）はナカウミ（琵琶湖）ですね。それがハラミを潤してヤツミネ（富士山の中心峰）の裾野には水が豊富です。周りのヤツウミ（八湖）のうち、三っつが噴火で埋まってしまいました。が、ハラミヤマの中は変わらないですね』

そして、フトニのキミはおウタをお詠みになります。

なかはふり　なかばわきつつ
このやまと　ともしつまりの
このやまよこれ

この、御製をお詠みになりまして、ハラミヤマに新名称を付けたいものだとおっしゃいますのでした。

この時に、タコ（田子）の浦の人がフヂ（藤）のハナ（花）を捧げて来ました。このフヂ（藤）の花に、ハラミのユカリを感じられたフトニのキミでした。そこで、また、おウタを、お詠みになられます。

はらみやま　ひとふるさけよ
ふじつるの　なおもゆかりの
このやまよこれ

この、御製により、フジのヤマの新名称が始まりました。　ハラミヤマ、新名称のフジのヤマからの帰路には南路をおとりになります。そして、ムメミヤ（ハラミのミヤ）のハフリ（預かり人）のホツミ（のちの穂積）は、オシウト【詳細は未詳】の位に任じました。イツ（ヲハシリ）と、アサマ（コノハナサクヤヒメ）と、ミコ【詳細は未詳】と、ヤマスミ（オオヤマスミ）の、４カミ（祖先の偉人）をヤスカワラ【詳細は未詳】に移して祭りました。

この時に、タケヒテルが、タマカワのフミを献上したのでした。とても、重要なフミでして、カンタカラフミとして尊重されるものです。タケヒテルは、その昔の十代アマキミの二ニキネの、長男のムメヒトさん（ハラヲキミ）の伝えを受けていました。それで、ミノリ（身を整える、方法）を得られておられたので、カミヨ（上代）のように長寿を実現なさっておられました。フトニのキミは、タケヒテルさんの子供の、タケトメをトミ（臣）に求められるのでした。その弟のタケツツクサが、タケヒテルの家の祭りを継ぐ事になりまして、後のタケタ（後の武田）になります。タマカワのカンタカラのフミは、イツモ（出雲）に納め置く事になりました。

七代ヤマトフトニ（孝霊天皇）の、５３年（アスス４８０年）に、西

のクニに揉（も）め事が起きました。そこで、勅任の執政官を遣わします。チノクチと、ハリマ（播磨）のヒカワ（加古川）に、インヘヌシ（のちの忌部）にヤマトヰサセリを副（そ）えて派遣しました。また、キヒ（吉備）のカンチ（上道）には、ヱワカタケヒコを派遣します。キヒ（吉備）のシモチ（下道）には、トワカタケヒコを派遣します。そして、拘（こだわ）りの問題点を解き分けさせて平安を回復しました。

イササワケ（敦賀）には、ヒコサシマを勅任の執政官として派遣して、コシクニを治めさせます。

７６年（アスス５０３年）のキサラキ（２月）１０日に、フトニのキミが崩御なさいました。１１８歳でした。ミコのクニクルさん（八代孝元天皇）は、モ（喪）を４８日間務められまして、トミトトム【詳細は未詳】。さらに、６年間にわたってお食事のお供えを、おわします如くに続けられるのでした。こうして、敬いを為されておられるうちに、トミも世を去るのでした。クニクルさんは、カリト（仮のトミ）を立てるのみにて、ヲヤに仕えるまことの篤いお方であられました。

八代・クニクル（孝元（こうげん）天皇）

時は、アスス５０４年１月１４日に、クニクルさんはアマツヒツギ（天皇位）を受け継がれまして、ヤマトクニクルのアマツキミと名乗られます。アメのミマコ（十代アマキミのニニキネ）の即位式を前例となさいますのは、常のごとしでした。翌日には、即位式の設えをタミ（国民）に公開なさいます。タミは拝見がかなうのでした。

生母のホソヒメさんを、ミウエキサキとして尊びます。

八代クニクル（孝元天皇）の、１２のツホネ（お局）のおキサキさんを立てられました。

４年（アスス５０７年）のヤヨヒ（３月）に、新しいミヤコ（新皇居）のカルのサカイハラ（橿原市見瀬町）に遷御になりました。

５年（アスス５０８年）のナツ（夏）にウチキサキのウツシコメが、ミコをお産みになられます。ヤマトアエクニ・オオヒコさんです。

６年（アスス５０９年）のナツキ（９月）６日にイホトミヤのオモムロ（ご遺体）をムマサカのミササキ（奈良県北葛城郡王寺町本町、片岡の地）に、お納めします。

７年（アスス５１０年）のキサラキ（２月）２日に、ウツシコメさんがウチミヤ（正皇后）になられます。また、兄のウツシコヲ（後に物部

氏）はケクニトミに任じられました。

この年、12月の1日（初日）の日の出と共にウツシコメさんがお産みになられたミコが、ワカヤマトネコヒコのフトヒコさん（後の開化天皇）でした。

八代クニクル（孝元天皇）の、9年（アスス512年）のナツ（夏）に、長雨が降りました。40日も降り続きヤマシロ（山城）の田圃が浸水します。アワウミ（琵琶湖）も洪水になりまして、早苗はミモチ病に侵されます。人々からの嘆きの告げに、八代クニクルのスヘラギ（孝元天皇）は晴れを祈る勅使のミケヌシ（ヲミケヌシ）を使わされました。ミケヌシは、アワクニのミヲ（高島市安曇川）に赴いて、タナカカミを祭ります。（田中神社）ここに、晴れを祈る「カセフ」の祭典をおこなうのでした。「カセフ」は、オオナムチのイツモ（出雲）のタナカでの祭りに拠るものでした。【詳細は未詳】ミナツキ（6月）16日に祭りがおこなわれます。ヲシクサ（教えのクサ）の守りによりまして、タ（田）にミケヌシが額ずいて祈りました。そうしましたら、イネ（稲）は蘇えって若やぐのでした。アキ（秋）には実りも充実して、ミツホ（収穫）も良くなりました。タミのカテ（食料）も増えて、賑わいを取り戻しえたのでした。ミケヌシはオホミケヌシの尊号をもって称（たたえ）えられました。

カセフの祭りを、年毎にする事になります。ツクシ（九州）のナオリと、イツモ（出雲）と、イセ（伊勢）にも、ハナヤマ（山科）にもおこなわれます。

11年（アスス514年）のヤヨヒ（2月）のモチ（満月）にトトヒメが生まれます。共にミユキ（行幸）に連れて、ヘソキネ（ウツシコヲ）の家（後に物部氏）のヤマトイケスに向かわれました。ヘソキネは、饗宴を用意して持て成します。ヘソキネの娘のイカシコメ（後にイキシコメ）が給仕に出てきまして、ウチキサキにと宮中に召されました。イカシコメさんは14歳でした。

13年（アスス516年）の1月3日に、イカシコメさん（後にイキシコメ）がミコのオシマコト（ヒコフト）をお産みになります。

14年（アスス517年）のフツキ（七月）に、ハニヤスメさんがミコをお産みになります。ハニヤスヒコのイミナ（実名）タケハルさんです。（後に、ハニヤスヒコの乱を起こす人です）　ハニヤスメさんは、カウチ（アオカキカケ、アウヱモロの子孫）のアオカキカケの娘さんでして、メのオシモの位でしたので、ウチキサキの位に上がられます。

22年（アスス525年）1月12日に、立太子が定まります。ヨツギ（世継ぎ）はフトヒヒさんです。ワカヤマトネコ・フトヒヒさんは、

後の八代開化天皇です。

さて、オシマコトのミコ（皇子）はオクチの妹のタカチメ（タカチヒメ）との間にウマシウチを儲けます。ウマシウチは、キ（紀）のウツの妹のヤマトカケヒメを娶ります。そして、産まれたのがタケウチです。

八代クニクル（孝元天皇）の、５７年（アスス５６０年）のナカツキ（９月）２日に、七代スヘラギのクニクルさんが崩御なさいました。１１７歳でした。ミコのフトヒヒさんは、モ（喪）を４８日なさいます。そして、生きませる如くのままにミアエ（お食事）を供えます。モの４８日が過ぎて、マツリコトをお聞きになられます。６年後には、オモムロ（ご遺体）をツルギシマのミササキにお納めするのでした。ナツキ（６月）２４日にめともやむなり。（お仕えしていた人々も去って行きます）

九代・フトヒヒ（開化天皇）

時はアスス５６０年の、フユ（冬）のメツキ（１０月）の１２日でした。

フトヒヒさんは、九代スヘラギ（開化天皇）に即位なさいます。ミヤコ（首都）は、カスガ（奈良市）のイサカワ（奈良市本子守町、率川神社の付近）にお決めになりました。フトヒヒさん５１歳の事でした。

ネツキ（１１月）の１２日にアマツヒツギへの即位の儀式を挙行なされます。ワカヤマト・ネコヒコのアメのスヘラギとなられました。

翌日には、即位の祭典の設（しつら）えをタミに公開なさいます。

ハハ（実母）のウツシコメさんを、ミウエキサキとして尊ばれます。また、フトヒヒさんには、ソフ（１２）のツホネ（局）も既に揃っておいでした。

アスス５６１年のキナヱ（２１）の年を、フトヒヒのキミの初年となさいます。

九代フトヒヒ（開化天皇）の、７年（アスス５６７年）ハツ（１月）１２日に、イカシコメさんをイキシコメさんと名前を変えてウチミヤ（正皇后）にお立てになりました。イカシコメさんは、先のクニクルのキミ（八代孝元天皇）との間にオシマコトのミコ（皇子）を儲けておられました。

フトヒヒのキミが、イカシコメさんを召そうとなさいます。これに際して、ミケヌシ（オミケヌシ）は、イサメ（諫言）を申し上げていました。

『キミはお聞きでありますでしょうか？
カミヨ（上代）のことに、シラウトとコクミがハハ（母）を犯してミチを乱した事件がありました。ここから、多くの混乱が生じましたのでした。
その、ガナ（大きな誤り）が今に起きようとしています。
キミよ、シラウトやコクミのような事をなさいますのでしょうか？
（ホ６-１１～１３・ホ６-１７～２２・ホ７-１～１９・ホ８-１～５・ホ９-１４～１６・ホ９-２１～２３）
ガナ（大きな誤り）は大災害を引き寄せる事になりかねません』
モノヘ（後に物部氏）のウツシコヲは答えます。
『ハハではなく、メイ（姪）に当たりますから問題にはなりません。その理由は、「イセのミチ」に拠るところのものです。「メ（娘）はトツギ（嫁い）で、ウミ（産み）のヲヤ（親）無し」と「イセのミチ」にあります。つまり、昔は確（たし）かに、オハ（おば・伯母）でありましたが、今はメイです。単なる親戚に過ぎません』
ミケヌシ（オミケヌシ）は、追及します。
『産む子のオシマコトさんが居られるのだから、義母でないとは言えないでしょう』
ウツシコヲはさらに答えます。
『単に、連なっているだけの枝のひとつのオシマコトさんです。何故ならば、ハハが別人で異なるからです』
ミケヌシは、まだまだ追及します。
『ア（天空）にはツキ（月）は、たったひとつだけです。ハハ（母）はツキ（月）です。シモメ（他のおキサキさん）はホシ（星）です。この、ホシ（星）を召されようとしておられるのですよ』
深く嘆いて、ミケヌシは言葉を続けます。
『ヲヲンカミ（アマテルカミ）は、アメのミチをなされたのです。
世々のキミは、継ぎを受けられて長く治まって来ましたのでした。
今回のイキシコメさんのウチミヤ（正皇后）就任は、ミチを外していると言えます。
あなたはケクニトミ（３１－７０・８５・８９、３２－３６－１７）です。最も重臣です。マツリゴトの誤りをおイサメして申し上げなくて、どうしますか！
阿（おもね）って、おべっかを言うばかりでは、かえってキミをアナ（貶めてダメ）にするばかりです。心汚（きたな）しと言うものです。
キミが如何にお考えになりますか？
我が身の祖先のヲヤカミのクシヒコ（ヤマトヲヲコノミタマカミ）も、

守りを離れることになりますでしょう。（ホ２０－３０～３６、ホ２３－８６～９９、ホ２４－１０７～１１１）

汚（けが）れは、決して食（は）む事はしない、と、これは祖先のクシヒコの教えです』

ミケヌシは、去って行きます。

フトヒヒのキミ（九代開化天皇）は、やはり、イカシコメさんのウチミヤ（正皇后）就任を変えませんでした。イカシコメを、イキシコメと、一音変名にしただけでした。

ミケヌシとその子は、ツクミ（隠棲）をして、地方にひっそりと暮らすのでした。

・

九代フトヒヒ（開化天皇）の、7年（アスス５６７年）のシハス（１２月）の１３日に、ミコ（皇子）が誕生します。ユギリ（カツテカミの子孫）の娘のタケノヒメさんが、ユムスミさんを産みました。イミナ（実名）はコモツミさんと申し上げます。

８年（アスス５６８年）ヤヨイ（３月）には、カスガ（五代カヱシネ、孝昭天皇のミコのカスガヲキミの子孫）のオケツメさんがスケキサキの位にあって、ヒコヰマス（イミナはアリスミ）のミコをお産みになりました。

１０年（アスス５７０年）サ（５月）の１２日に、ウチミヤ（正皇后）のイキシコメさんが、ミマキイリヒコ（イムナはヰソニヱ）さんをお産みになられます。のちの、十代スヘラギ（崇神天皇）になられるお方です。

ミナツキ（６月）の１２日には、ヘソキネ（ウツシコヲ）をオトト（大臣）となさいます。またさらに、ネ（１０月）には、ウツシコヲをイワイヌシ【詳細は未詳】となさいました。

１３年（アスス５７３年）のムツキ（１月）５日に、イキシコメさんは、ミマツヒメをお産みになります。

ウチメに召していた、カツキのタルミの娘のタカヒメが、サ（５月）のモチ（満月）に、ハツラワケ（イムナはタケトヨ）さんを産みました。

２８年（アスス５８８年）のムツキ（１月）５日に、世継ぎが定められます。ヰソニヱのミコ（ミマキイリヒコ）が、お世継ぎです。この年に、１９歳でした。

６０年（アスス６２０年）ナツ（夏）のウツキ（４月）１０日に、フトヒヒのキミ（九代開化天皇）はお亡くなりになりました。１１１歳でした。ミコのヰソニヱさんはモ（喪）に入られます。そして、４８日の後にマツリコト（政治）を再びお聞きになるのでした。近習のトミは留

無断転載を禁じます。

め置かれまして、ご生前、おわされましての時代と同様に、おいでなさいますが如しのミアエ（お食事）をお供えします。

メツキ（１０月）の３日になって、イササカのミササキ（奈良市油坂町）に、フトヒヒのキミ（九代開化天皇）のオモムロ（亡き骸）をお納めすることになりました。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

ホ３３　カミアガメ（祖先）　ヱヤミ（流行性疾病）タス（直す）アヤ

十代・ミマキイリヒコ（崇神（すじん）天皇）　前半

アスス６２１年のキナヱ（２１）のハル（春）の１月のネシヱ（１９）が１日で、キシヱ（３１）の１３日の日の事でした。

ヰソニヱのミコは、アマツヒツキ（天皇位）を受け継がれまして、ミマキイリヒコのアマツキミ（崇神天皇）と名乗られます。ミクサタカラの授受の使いも、アメタメシで、アメミマコ（ニニキネ）からの伝統の通りにおこなわれました。翌日には、儀式の飾りをタミ（一般国民）に公開なさいます。

ハハ（生母）のイキシコメ（イカシコメ）さんをミウヱキサキとして、尊びますこと、常の如くです。また、オオハハ（祖母）のウツシコメさんは１６２歳になられておられて、オオンキサキとして尊びます。

初年のキサラキ（２月）の１日がサウト（４８）で、ツミヱ（３）の１６日にキサキを定められます。オオヒコの娘を召してミマキヒメとなさいました。筆頭のおキサキさんです。ミマキヒメは１１歳でした。キのアラカトへの娘のトオツアヒ・メクハシヒメはオオスケキサキです。アフミの娘のヤサカ・フリイロネヒメは、カリ（仮り）のスケキサキです。また、オハリの娘のオオアマ・ウチヒメは、ナカハシ（後の長橋）のオシテ（ヲシテ）を司る守り役です。

さて、この以前の事で、ミコやヒメミコの誕生の事がありました。メクハシヒメは、トヨスキヒメをお産みになっていました。オオアマヒメはヌナキヒメをお産みになっていました。また、メクハシヒメは、ヤマトヒコをお産みになっていました。ヤマトヒコのイムナ（実名）はヰソキネです。ヤサカフリイロネヒメはヤサカイリヒコ（オオキネ）をお産みになりました。この故に、ヤサカフリイロネヒメは、カリスケキサキに上らせられたのでした。

十代ミマキ（崇神天皇）の世の、３年（アスス６２３年）のナツキ（９月）にシギのミツカキ（桜井市金屋）にニイミヤコ（新皇居）を開かれました。

４年（アスス６２４年）のメ（１０月）スエミカ（２３日）にミマキイリヒコ（崇神天皇）はミコトノリを発っせられました。

『ミヲヤ（先祖のアマカミ）の授け下さいました、ミクサモノ（ミクサタカラ・三種の神器）のことをよく考えるのです。それは、すなわち、初代のクニトコタチさんからカンヲシテ（トのヲシテを始めとする文書）

（C）　池田　満

が代々引き継がれてきました。アマテルカミは、ヤタカガミをお作りになられました。また、オオクニタマ（クシヒコ）はヤヱカキのツルギを守ってくれています。

常にマツリてこそ、ミとカミと（身体と精神と）距離をおくことなく過ごせます。「トのヲシヱ（ヲシテ）」の通る姿も、ミクサタカラのウツワ（神器）と共に澄みきたります。（シトミ・ト、ホー２１－４３）

このため、畏れを抱くのです。それは今の現状で、十全のマツリをおこなえているのだろうかと言う事です。このため、カガミのアマテルカミと、ツルギのオオクニタマ（クシヒコ）を、専門に祭るべきかと思い至ったのでした。

アマテルカミは、カサヌヒの地【論地は多し】にて、トヨスキヒメに祭らしめます。

オオクニタマは、ヤマへのサト（天理市、大和神社?）にて、ヌナキヒメに祭らしめます。

また、ミクサタカラ（三種の神器）も新調します。イシコリトメのマコ（子孫）にカガミを作らせます。アメヒトカミ（アメマヒトツ）のマコ（子孫）にツルギを作らせます。また、アマテラスカミのヲシテも新調して作ります。これからのアマツヒツギ（天皇位）のミクサタカラとなるウツワです』

・

ミマキ（崇神天皇）の世の、５年（アスス６２５年）になりまして、疫病の流行がおきました。タミ（国民）の半数が亡くなってしまう猛威でした。

十代ミマキ（崇神天皇）の、６年（アスス６２６年）には、タミのチル（集落の崩壊）の事態になりました。コトノリに「タシガタシ」と言わざるを得ない状況です。ミマキイリヒコ（十代、崇神天皇）さんは、ツト（早朝）に起き出されましてツミ（罪）をカミに乞はれるのでした。そして、フタミヤを新たに建立し直します。アマテルカミのミヤと、オオクニタマ（クシヒコ）のミヤのフタミヤです。ヨヨまもらんは　アメのミチ　ミモロのヤマにホラ掘りて…。（『ホツマツタヱ』２３－９７）

この年（十代ミマキ６年、アスス６２６年）のアキ（秋）になって新築の出来ましたオオクニタマのミヤに、カミ（ミタマ）を移します。ナツキ（９月）１６日の夜のことでした。また、翌日の１７日の夜にはアマテルカミのミヤにカミ（ミタマ）を遷します。トヨのアカリの色も良し。いざともカミ（ミタマ）は下ります。イロのツズウタ。

いさとほしゆきのよ
ろしもおほよすがらも
（４アヤ２６ページ参照、ヤマスミの祝賀のウタ）
むへなるや　ゆきのよろしも

みよつきも　よよのさいわい
ひらけりと
（アマテルカミのユキ（前世）が、
とても、お良しかったのだろう）

ミマキ（崇神天皇）の世の、7年（アスス627年）のキサラ（2月）の3日にミマキイリヒコ（十代崇神天皇）のスヘラギはミコトノリを出されます。

『我がミヲヤ（祖先）のクニを開く基礎は立派で盛んでありました。それが、我が世に至りましてヲエ（病気の蔓延）のあることは、マツリ（誠心誠意の恵み及ぼし）の充分に届かないことへのトガメ（咎め）に拠るのではないかと、推測するのです。

この故に、ケタ（四角い、しっかりさせる）を為して、極めてその原因を探るべし』（後世での四方拝に繋がってゆくか？）

と、仰いまして、アサヒのハラ（榛原市、阿紀神社）にミユキ（行幸）をなさいます。そして、ヤソヨロのカミ（ミタマ）を招くため、ユのハナ（ユリの花）の設えをして、モモソヒメにミコトノリをしてウタを詠ましめるのでした。そうしまして、モモソヒメは心に浮かんだイメージを、ツズウタに詠み上げました。

さるたみもつすにま
つらてをゑにみたるさ

ミマキイリヒコ（崇神天皇）は問います。

『かく教えてくれるカミ（ミタマ）は、一体何方（どなた）ですか？』

カミ（ミタマ）は答えて、

『我は、クニツカミのオオモノヌシ（クシヒコ）です』

ここに、ミマキイリヒコのキミは、改めてオオモノヌシを祭るのでした。ですが、何の印しや兆しも得られませんでした。そこで、キミは親（みづか）らユアヒ（ユアミ、湯気のミソギか？）をなさいます。そして、スガ（清らかに、一心に）に祈りまして、ツケ（告げ）申されるのでした。

『吾（われ）は、あなた様を敬っておりますのですが、お話さへお聞かせくださいませんのでしょうか？』

この夜、ミマキイリヒコさんは夢を見ます。夢の中で、オオモノヌシ（クシヒコ）が答えます。

『我れは、これ、オオモノヌシのカミであります。

「ガ（良くない出来事）」について、キミなうれひそ（憂い賜ることは必要御座いません）。タセザル（治世が上手く行かないのは）は、我

がこころ（意図）があるためです。
　我がハツコ（子孫）のオオタタネコに祭らせましたならば、等しく平穏に収まります事でしょう。これは、トツクニ（遠国）にまでも広く及ぶでしょう』
　ハツキ（８月）のナカ（中旬）に、３人もの人が、同じ夢を見たと言上してきました。トハヤのチハヤのメクワシヒメが一人目でした。オオミナクチも、イセヲウミも、夢のことを言上してきました。
　『夢にカミが現れたのです。そして、「タタネコをオオモノヌシのイハヒヌシ（祭主）と為せ。ナガオイチをオホヤマト・クニタマカミ（大和神社）のイハヒヌシ（祭主）と為さば、ムケヘシ（収まる）」と仰いますのです』
　３人が３人とも、同じ事を言います。そこで、ミマキイリヒコさんは夢合わせをして、納得なさいますのでした。そこで、オオタタネコを、尋ね探し求めるのでした。すると、チヌ（大阪府）のスエ（堺市上之、陶荒田神社か？）にひっそりと暮らしている事が報告されました。
　ミマキイリヒコさんは、ヤソ（８０人）のトミ（臣）達と共に、チヌ（堺市）にミユキ（行幸）をなさいます。そして、タタネコ（オオタタネコ）に会いまして、お問いになります。
　『あなたのご先祖は、何方ですか？』
　そこに、タタネコは答えますのでした。
　『昔のことに、モノヌシ（３代コモリ）がスエツミの娘のイクタマ（イクタマヨリヒメ）と産むモノヌシ（４代カンタチ）の子孫がオオミワのカハネ（姓）を賜りました（７代アタツ・クシネ）。そのハツコ（直系の子孫）が私タタネコです』
　ミマキイリヒコのキミ（十代、崇神天皇）は、「これで、栄える事が出来る」と楽しみたまうのでした。そこで、イキシコヲに占わせますと、「まこと、良し」の結果が出ました。さらに、他のカミをもって「フトマニ」で占わせてみますと「悪るし」の結果が出ました。
　７年（アスス６２７年）のメツキ（１０月）の１日に、カミ祭りをおこないます。イキシコヲ（物部氏）はヤソヒラカ（８０枚のお祭りの為のお皿）を作ります。そして、オオタタネコをオオミワのカミ（大三輪神社）のイワヒヌシ（祭主）としまして、ナガオイチはオオクニタマ（大和神社）のイワヒヌシに定めて、広く天下に知らせました。これより、カミを崇（あが）める事をもっぱらとして、カミナフミナス　カンヘ【詳細は未詳】をして、ヤソヨロカミを祭らせるのでした。
　この結果、ヱヤミ（疫病）も直り、ソロ（水田の作物、畑の作物）も実って、タミも豊かさを取り戻したのでした。

十代ミマキ（崇神天皇）の、８年（アスス６２８年）ウ（ウツキ、４月）４日に、タカハシ・イクヒはミキ（お酒）を作り、オオミワカミに奉りました。そのミキの味は美味（うま）かったのでした。

シハス（１２月）８日になりまして、また、オオミワのカミを祭らせて、ミマキイリヒコさんもミユキして親(みず)からお祭りなさいます。イクヒの酒をお供えしましてミアエ（ご馳走）をします。この時に、ミマキイリヒコさんはおウタ（御製）をお詠みになりました。

このみきは　わがみきならす
やまとなる　おほものぬしの
かみのみき　いくひさつくる
すぎはいくひさ

ミアエを終えて、トミ達が歌うのでした。

うまさけや　みわみわのとの
あさとにも　いててゆかなん
みわのとのとお（を）

時に、ミマキイリヒコさんは、カエウタ（返しウタ）をお詠みになります。

うまさけに　みわみわのとの
あさとにも　おしきらかねよ
みわのとのとお（を）

トのトを押して開きて、帰りますのでした。

・

１０年（アスス６３０年）のヤヨヒ（３月）のモチ（望月）に、ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんは夢を見ました。夢に、カミがツゲ（告げ）るのでした。

『カシキ（赤・白・黄色）のホコを立ててカミを祭れ。

ウタ（宇陀）のスミサカ（宇陀市榛原区萩原、墨坂神社か？）も、オオサカ【現在地、未詳】も、カワセサカ（彦根市、河瀬神社か？、『延喜式』での川桁神社）も、ミオ（安曇川平野のミオカミ、三尾神社・三生重神社・水尾神社などか？）も、残りなく祭るべし。

これは、ツミヒト（罪人）のシイ（シヰ、強いる事）を、何とか止（とど)める事になります。さらには、ヱヤミを為してしまう真の原因にも、対処が必要です』

ウ（ウツキ、４月）のスエフカ（２２日）に、ヲトミ（中心のトミ・カガミのトミ）のヲヲカシマ（カシマ）と、タタネコに、タマカエシノリ（迷えるタマを、アモトに還す祭り）を祭らせるのでした。此れに拠りて、アカルキ（天下が晴れた）になりましたのでした。

無断転載を禁じます。

・十代ミマキ（崇神天皇）の、ソホ（１０年、アスス６３０年）ネヤトのフツキ（７月）のスエヨカ（２４日）に、ミコトノリを発せられました。

『タミのアヤミ（疫病）をタス（直し癒す）ヲシエ（教え）は、カミマツリによって、実現を得ましたのでした。

ようやく、ヲア（病気など災い）は去りましたが、トオツクニ（遠国）にはアラヒト（荒んだ人心）にの事でノリをまだ平（む）け得ないのです。この故に、ヨモ（四方）にヲシ（教え人・勅使）を遣わして、ノリを教えて平穏を齎したいのです』

ナツキ（９月）９日に、４人のヲシ（勅使）にヲシテ（ヲシテの御旗）を賜ります。

オオヒコは、コシ（越前・越中・越後）のヲシです。

タケヌナガワケは、ホツマ（関東地方）のヲシです。

キヒツヒコは、ツサ（西南方面）のヲシです。

タニハチヌシ（タニハ・ミチヌシ）は、タニハ（丹波）のヲシです。

ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんは、ミコトノリをしておっしゃいます。

『ヲシエを受けないで反抗をする人があれば、ホコロハセ（亡ぼせ）』と、ヲシテ（ヲシテの御旗）をそれぞれ４人に賜るのでした。そして、それぞれが、イクサ立ち（戦闘支度での出発）をします。

さて、オオヒコは、９月のモチ（望月）に、ナラサカに至りました。すると、一人のオトメ（少女）がウタを歌って聞かせるのでした。

みよみまき　いりひこあはゃ
おのがそゑ　ぬすみしせんと
しりつとお（を）　いゆきたがひぬ
まえつとよ　いゆきたがひて
うかがわく　しらしとみまき
いりひこあわゃ

このウタを聞いたオオヒコは、アヤシク（不思議に思って）感じて、戻って、オトメに聞きました。

オトメは、いいます。

『われは、ウタを歌うのみ』

と、言うと消え失せてしまうのでした。

オオヒコは、胸騒ぎを覚えて、ミヤコのミツカキのミヤに立ち返ることにします。

（C）　池田　満

ホ３４　ミマキのヨ ミマナ の　アヤ

十代ミマキイリヒコ（崇神天皇　後半）

ミツカキ（桜井市金屋）のミヤコの、ミマキ（崇神天皇）の世の、１０年（アスス６３０年）ナカツキ(９月）１７日に、コシ（越中・越後・越前）のヲシ（勅任執政官）に任命されたオオヒコが、一旦帰京しました。

それは、ナラサカ（奈良市の北部・奈良坂）で、不思議なオトメ（少女）からウタを聞かされたからでした。ウタを告げたあと、オトメは消え失せたのですから、不思議です。

オオヒコは、ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんに申し上げます。

『わたくしは、ヤマシロへと道を進めていまして、ナラサカに至りました。すると、オトメがウタを歌って聞かせるのでした。

「みよみまき　いりひこあわや
おのがそゑ　ぬすみしせんと
しりつとお（を）　いゆきたがひぬ
まえつとよ　いゆきたがひて
うかがわく　しらしとみまき
いりひこあわや」

ここに、胸騒ぎを覚えまして、一旦戻りました次第で御座います』

ミマキイリヒコは、このウタは、何かの知らせだとお感じになりました。モモソヒメは生まれつき聡（さと）くてに、このウタに、ピンと閃くものがありました。モモソヒメは、キミに申し上げます。

『これは、シルシです。タケハニヤスが叛（そむ）いて反乱を起こそうとしているのでしょう。

わたくしは、聞きましたのでした。タケハニヤスの妻のアタヒメがカクヤマのハニ（埴土）を取って来て、ヒレ（甲冑のような防御服か?）に入れていました。そして、祈って言うのだそうです。「これを、クニのモノサネ」と。

これにおいて、証拠が揃ったのではないでしょうか?

急いで、対処方法をお考え下さいませ』

この、モモソヒメの話を、諸臣達もあわせて討議をしているうちに、すでに、タケハニヤスとアタヒメはイクサ（戦闘）を開始し始めていました。（タケハニヤスは、８代クニクル（孝元天皇）のミコ）。オオヒコとは義理の兄弟）

二手に分かれて、タケハニヤスはヤマシロを襲います。妻のアヤヒメはオオサカ【逢坂か？】を襲います。

そこで、ミマキイリヒコさんは、ミコトノリを発っして、イサセリのミコを、オオサカへの平定に向かわせます。ここに、迎えた戦闘で、イサセリヒコは、アタヒメを打ち破って殺して収まりました。

タケハニヤスのヤマシロ方面には、オオヒコと、ヒコクニフクを向かわせました。ヒコクニフクはヤマシロのワニタケスキにインヘ【詳細は未詳】を据えます。ツハモノを率いてイクサタテをして、キカヤ（樹木か？）を踏みむけて戦闘が始まりました。テガシワ（取っ掛かりの意か？）の戦闘を、ヒコクニフクが勝利しました、ナラサカでした。

オオヒコは、シモミチにてワカラアクラ【詳細は未詳】と、相い挑むのでした。ハニヤスヒコは、川（木津川）の北岸に、此のオオヒコの挑みを見まして、言うのでした。

『ナンチ（汝）は、何故に拒むのであるか？』

ヒコクニフクは、答えて言います。

『これナンチ（汝）よ、アメ（天皇陛下）にサカフ（逆らう）のを、討たしめられたるのです。（あなたは、朝敵になってしまっているのです）』

ここに、戦闘の火蓋がひらきます。タケハニヤスの射る矢は当たらず、ヒコクニフクの射る矢は当たるのでした。そして、タケハニヤスの胸に当たった矢で、亡くなるのでした。タケハニヤスの亡くなってのあと、残軍は散り散りになります。さらに、追討を続けましたら、「ワキミ、ワキミ」と流れて逃げ去りました。ここにイクサを収めて、全ての平定軍は帰朝するのでした。

メツキ（１０月）ハツヒ(1日)に、ミコトノリが出されました。

『ウチ（畿内）はムケレト（平定できた）、トツ（遠国）はまだまだアルル（荒れ果てている）。

ヨミチ（四方面）のイクサ（戦闘準備をした勅任執政官）タツ（出発）べし』

と。　そこで、スエフカ（２２日）に、改めてヨミチのヲシヱト（教える使者）が出発しました。

・

モモソヒメは、オオモノヌシのツマ（妻）となりました。不思議なことです。オオモノヌシは、ヨ（夜）に来るのです。しかし、ヒル（昼）には来た事も見たこともないのでした。そこで、モモソヒメは、願いを言うのでした。

『ヨが明けてから、キミの姿を見たいものです』

と、帰るのを止めるのでした。オオモノヌシのカミは、告げて言います。

『それは、イチシルシ（尤も当然なこと）ことです。
では、明日の朝に、わたくしはクシケ（櫛入れ箱）に入っておきます。
でも、わたくしの姿を見て決して驚かないで下さい』
と、言うのです。モモソヒメは不思議な思いを抱くのでした。

さて、明くる朝、クシケ（櫛入れ箱）を見ますと、コヘヒ（小蛇）が居るのでした。モモソヒメは、驚いて叫び泣きます。すると、オオモノヌシのカミは、ハヂ（恥じ）てヒトになり、言うのでした。

『ナンチ（汝）忍びずにして、これは、わがハチ（恥じ）です』
と、大空を踏み上って行くのでした。そして、ミモロのヤマ（三輪山）に入ってゆきました。

モモソヒメは、ミモロヤマを仰ぎ、そしてハチ（恥じ）るのでした。時にツキ（月経）が来て、ハシ（箸？）でミホト（陰部）を突いて、亡くなってしまうのでした。そこで、三輪山を望むオイチにハシツカのみ墓が作られるのでした。昼にはヒトの手により作られます。夜にはカミ（オオモノヌシ）がオオサカヤマの石を運びます。モロ（人々やカミ）が相次ぎて、タコシカテ【詳細は未詳】によって、ハカの成るウタ。

おほさかも　ツキのカお（を）そゑ
いしむらお（を）　タコシにこさは
こしかてんかも

・

十代ミマキ（崇神天皇）の世の、１１年（アスス６３１年）のウツキ（４月）１６日に、ヨミチ（四道）のイクサが全て、目的を達して、全国に平安が訪れたことの報告がありました。

アキ（秋）になって、早くに亡くなってしまった人を、ア（アモト）に還す為の「ヲを解く祭り」をすることになさいます。オオタタネコを祭主に決められて、ハシツカ（箸塚）にて祭りがおこなわれますと、カカヤク（輝く）ノリのイチ【詳細は未詳】となりました。

１２年（アスス６３２年）のヤヨイ（３月）の１１日に、ミマキイリヒコ（崇神天皇）はミコトノリを出されました。

『アマツヒツギを私が受け継ぎました。しかし、アメのオフヒ【詳細は未詳】も安からずでした。メ（冷たいナミ）と、ヲ（温かいナミ）の巡る強さも不調さを生じたのでした。このため、ヱヤミ（疫病）の流行になり、タミ（国民）の多くが亡くなってしまったのでした。

この原因は、ツミにありて、これを払う事こそ必要であると判断するに至りました。そこで、革（あらた）めてカミを敬（うやま）って、ヲ

シエ（教え）をタレ（教え育み治める、タスを為す）たのでした。それで、ヨモ（四方）のヤモ（ヤモヨロ・８００万・全国民）のアラヒトも、今に直って楽しみ生きるようになりました。

そこで、さらに、考えるところなのです。オサ（年長者）とイトケ（若年者）とのミチも明けるようにしたいものです。つまり、タミに負担してもらっている諸税を一部免除して、イトマ（暇・余裕）を作り出し、教育の時間に当てたいと思うのです。

このため、ユハツ・タツエ（弓などの上納税・タツエ?の税）のミツギを止める事にします。タミを賑わすのです』

こうして、ソロの時（収穫時か?）に、社会の雰囲気も温かく直っていったのでした。この御世を、誉め称（たた）えてハツクニシラス・ミマキのヨと呼ぶようになりました。

こうして、タミも楽しみ居ますと、キミのミマキイリヒコさんも、お心安らかでして、キサキも和やかになるのでした。

スケ・キサキのヤサカイリヒメは、トイチ（田原本町）に詣でてヒメミコ（皇女）のトチニイリヒメを産みました。

十代ミマキ（崇神天皇）の、２６年（アスス６４６年）ネツキ（１１月）のハツヒ（１日）に、ウチミヤ（正皇后）のミマキヒメが、シギ（桜井市）にてトヨキヒコ（シギヒト）をお産みになりました。

さらに、２９年（アスス６４９年）正月元旦のヲウトの日に、ミマキヒメはミコ（皇子）をお産みになります。イクメイリヒコでして、イムナ（実名）は、ヰソサチさんでした。

ミマキ（崇神天皇）の世の、３８年（アスス６５８年）アキ（秋）のハツキ(８月)５日に、ミマキヒメの妹のクニカタヒメがウチメの位で、チチツクワヒメを産みました。また、４０年（アスス６６０年）のムツキ（１月）スヱヤカ（２８日）には、イカツルさん（チヨギネ）をお産みになりました。

４０年のハツ（１月）の１０日のヲアエ（ヱ・ye）に、夢見のミコトノリを出されました。トヨキミ（トヨキイリヒコ）と、イキメキミのお二人に、おっしゃいます。

『ナンチ（汝）ら、メクミ（愛しみ）等しくて、継ぎを知る（次代の継承）ことのユメ（夢）をすべし』

二人は共に、ユアミ（湯気でのミソギか?）をして、夢見の結果を申し上げます。

兄の、トヨキミ（トヨキイリヒコ）は、

『ミモロ（三輪山）のヱ（山頂）にて、キ（東）に向きて８度ホコをユケシ【差し上げた、か?】』

弟の、イクメキミは、
『ミモロのヱにて、ヨモ（四方）に縄張り、ススメ（雀）オフ（追う）』
と、それぞれのユメ（夢）の結果でした。ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんは、このユメをお考えになられるのでした。そして、仰っいます。
『アニ（兄）のユメは、ただ東に向いてのことであった。それで、ホツマ（関東地方）を治めよ。
オト（弟）は、ヨモ（四方）にタミをヲサムル（教え諭して導き修む）ヨツギである』
そこで、ウ（４月）のソコカ（１９日）のツミエ（ヱ）の日に、ミコトノリを発っされました。
『ヰソサチ（弟のイクメキミ）を、ヨツギに立てることを宣言します。
また、兄のトヨキイリヒコはホツマ（関東地方）のツカサと為します』

・

ミマナのアヤ（韓半島南部の国）
ミツカキ（瑞垣、崇神天皇）にミヤコの営まれていた際の事でした。十代ミマキ（崇神天皇）の、５８年のハツキ（８月）に、ミマキのキミはミユキ（御幸）をなさいました。それは、ケヰオオカミ（気比神宮・敦賀市）に詣でるためでした。ここで祭典をしているときに、ツノが一つある人が、タタヨエリ（漂う、徒に寄って来、か？）でした。ところが、コトハ（言葉）は聞いても理解できませんでした。そこで、ハラ（富士山南麓）のミヤのトミのソロリ・ヨシタケ（徐福の子孫と考えられます、ホ３９－６７「ソロリには」の典拠あり）は異国の言葉に詳しいので、問わしめたのでした。すると、ツノがひとつある人が答えます。（我が国の言葉には、そう聞こえる訳です）
『わたくしは、カラクニのキミのミコであります。ツノガアラシトと言います。父の名はウシキアラシトと言います。
尊いお方だと伝え聞きましたヒシリのキミに、マツラフことにと決めて尋ね来たりましたのです。
初めに、アナト（下関のあたり）に至りましたら、ヰツツヒコが言いました。「このクニのキミはわれなり。ここに居れば良い」と。ですが、その人なりを見まするに、どうもきちっとしたキミとは違うようでした。
そこで、其処を辞しまして、ミヤコへと道を取りました。ウラシマを転々と尋ね歩いて、イツモ（出雲）をへて、漸くここに辿り着きました。カミ祭りのため、キミはケヰにおいでであると聞きましたからでした』
ここに、ツノガ（ツノガアラシト）を、仕えさせる事になさいました。

５年のうちに、マメ（忠節）が認められました。そこで、「ミマナ」と言うクニの新名称をツヌガアラシトに賜るのでした。「ミマキイリヒコ（崇神天皇）」さんのお名前からの命名です。韓半島の南岸の中央部の「カラ」は「ミマナ（任那）」と称されます。また、帰国にあたって、土産物を賜るツノガアラシトでした。カソミネ・ニシキ（北海道の錦の織物）を土産物に、ミマナクニ（元はカラクニ）に帰って、ここにクニとクニとの行き来が結ばれたのでした。

さて、帰国の途に就いたツノガアラシトは、海を渡り韓半島に戻ります。シラギのクニからの陸伝いにミマナ（カラ）への道でした。アメウシ【牛の一種、詳細は未詳】に荷物を乗せての行程でしたが、ある時ウシがいなくなってしまいました。そこに、ヲキナ（老父）が居て、答えます。

『ウシの事なら、大体想像されます。この先にて、既に御馳走にと食してしまう集まりがあるようでした。

若（も）しも、ウシの持ち主が来たらば、アタヒ（対価）を払おう。と、言っていたようでして、もうウシは殺してしまっていますですね。

これは、お勧めですが、この先でアタヒを問われたならば、「祭るカミを、得ん」と、お答えになるのが宜しいでしょう』

ツノガアラシトがその村に行きますと、ムラキミがウシ（牛）のアタヒを問うのでした。ツノガアラシトは、「祭るカミを得ん」と言うと、差し出された、カミのシライシを持ち帰るのでした。

さて、枕元に置いておくと、シライシはオトメに変化するのでした。ツヌガアラシトはオトメにトツガンとして思い行くうちに、ヒメは失せてしまいました。さらに、家に戻ってツマに問いますと、「オトメはキサ（東南）に去りました」と言うのです。

ツノガアラシトは、オトメの行く跡を訪ねて追い行きまして、フネを海に浮かべまして、また日本に来ます。ついに、ナミハ（大阪）のヒメコソのミヤ（大阪市東成区東小橋、比売許曽神社）にて、会うことが出来ました。しかしオトメは、また、ここから出て行きまして、トヨクニのヒメコソのミヤ（豊前、大分県東国東郡姫島村、比売語曽神社）にてカミになってしまいました。（姫島は、良質の黒曜石のとれる所です。象徴的な記述がここに為されているのかも知れません）

結局、ツヌガアラシトは土産物を奪われてしまったのでした。この故に、シラギとミマナ（カラ）との間にアタ（アダ、仇敵関係）が生じるのでした。このため、ミマナからの使いがまた、ミマキイリヒコさんの許に来ります。ミマナの使いは言います。

『我が国のキネ（東北）に、ミハエという土地があります。カミハエ・

ナカハエ・シモハエのミハエは、広い土地で肥えた土でタミも豊かです。ところが、隣国のシラギとの抗争が起こってから、ミハエは治め難くなってしまいました。ホコをタツネテ【詳細は未詳】タミ活きず、の、有様です。

そこで、私ミマナのトミとしての願いで御座います。クニムケのヲシ（勅任の平定軍）の派遣を希（こいねが）うばかりで御座います』

ミマキイリヒコさんは、諸臣と対応を協議なさいます。トミは申し上げます。

『派遣する人の人選につきまして、クニフク（ヒコクニフク）のマコ（子孫）のシホノリツさんが最も良いと思われます。（5代カアシネ（孝昭天皇）の長男のカスガヲキミ（オシキネ）の子孫）

シホノリツは、コウヘ（頭）にミコフ（瘤）があってマツのキミとも渾名（あだな）されていまして、背丈がヒタケヰタ（1丈5尺）あります。力も強くてヤソチカラ（８０人力）だと言われて、イサミも激しいので、派遣に最適でありましょう』

ミマキイリヒコさん（崇神天皇）はミコトノリをしておっしゃいます。

『シホノリヒコ（シホノリツ）をして、ミマナ・ヲシに任じます。

ミマナに行き、速やかに平定を為すミチツカサとしての任です。平定後は、帰国すると良い』

と、シホノリヒコにカハネ（姓）を賜うのでした。（ワニのカハネか？、ホ３６-３３。後の子孫の吉田連（きちだのむらじ）は、『続日本紀』『続日本後記』『新撰姓氏録』に典拠あり）

・

十代ミマキ（崇神天皇）の、６０年（アスス６８０年）のフツキ（７月）１４日に、ミコトノリが出されます。

『昔、タケヒテルが献上してきたタマカワのカンタカラフミ（ホ３２-２６）を、再び見たいと思うのです。今、イツモ（出雲）に納めてあるのですね』（７代・フトニのキミ・考霊天皇の時の話です）

十代ミマキ（崇神天皇）のキミのミコトノリを受けて、タケモロスミが使者にと勅命を受けました。そうして、タケモロスミは、イツモ（出雲）に遣わされました。

ところが、イツモ（出雲）の当主のカンヌシのフリネはツクシ（九州）に、たまたま出かけて行っていて留守でした。フリネの弟のヰイリネは、ミヤからタマカワのカンタカラフミを出して来て、タケモロスミに渡しました。そして、弟のウマシカラヒサと、子のウカツクヌを、お供に添えて、ミマキイリヒコさんへ捧げるのでした。

さて、ツクシ（九州）から帰って来た当主のフリネは、弟のヰイリネ

の対応を責めます。カンタカラを捧げるべきでなかったと言うわけです。

『わたしが帰るまでたったの幾日も待たないで、何故？　タカラを渡してしまったのだ。恐れての事か？

我が国イツモ（出雲）は、ヤモヨロフミ（数多くの文献）を隠し置くからこそ尊いのだ。これが故の、未来の栄えの元であることが解らないのか！

どうして、容易（たやす）く出してしまったのだ！』

と、恨みを抱くのでした。弟ヰイリネを忍び殺しにしてしまう、強烈な恨みでした。

兄のフリネは、欺（あざむ）いての図り事で、弟のヰイリネを花見に誘います。

『ヤミヤのタマモ（出雲市の塩冶（現、大津町）に池か水沢があって、水草の花が綺麗だったと推測されます。阿須利神社・出雲市大津町龍王山に伝承あり）が、花盛りで良い見頃だと聞いたので、一緒に行きて見たいものだが、どうだろうか』

誘うフリネでした。弟のヰイリネは疑いもなく頷（うなず）いて、兄のフリネと共に出かけたのでした。フリネは、キタチ（木刀）を抜き置いて水浴びをします。そして、ヰイリネを誘いました。ヰイリネはツルギを抜き置いて水浴びに入りました。さて、兄のフリネは、先に水から上がると弟のヰイリネのツルギをハク（佩く、付けます）のでした。ヰイリネは驚いて水から上がって、フリネのキタチ（木刀）をハキ（佩く）ます。フリネがツルギを抜いて斬りかかって来ますと、ヰイリネも防戦のため刀を抜こうとしますが、哀れキタチは抜けません。ヰイリネは、ヤミヤミフチ（ヤムヤの地の淵）に、兄に斬り殺されてしまいました。

世に、流行り歌が広まります。

やくもたつ　いつもたけるが
はけるたち　つつらさわまき
あわれさひなし

ヰイリネの弟のカラヒサ（ウマシカラヒサ）はオイ（甥）のウカツクヌを連れて、ミヤコに上（のぼ）ります。ミマキイリヒコ（崇神天皇）に、兄のフリネが、弟のヰイリネを謀殺した殺人事件を告げました。

そこで、ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんは、ミコトノリして、キヒヒコ（キビツヒコ）と、タケヌワケ（アヘ・タケヌガワケ）に、フリネを討たせます。イツモ（出雲）の当主のフリネが討たれての恐懼（きょうく）に、イツモ（出雲）では先祖のカミ祭りもし得ない状態になりました。

ある日の事でした、ヒカトヘ【詳細は未詳】が、近々に詠んだ我が子

のウタを、ワカミヤ（東宮）のイクメのキミ（32歳）に申し上げるのでした。

たまもしつ　いつもまつらは
まくさまし　かよみおしふり
ねみかがみ　みそこたからの
みからぬし　たにみくくりみ
たましつか　うましみかみは
みからぬしやも

ウタのアヤ（織り為された意味）は、カミの告げであるかも知れないと、ミマキイリヒコのキミ（崇神天皇）に告げます。ミマキイリヒコさんは、ミコトノリして「イツモ（出雲）の祭りをするべし」とおっしゃいますのでした。（大阪府富田林市宮町に、美具久留御魂神社があります。『延喜式』にも記載されています）

・

十代ミマキ（崇神天皇）の、62年（アスス682年）のキナト（22）の、アフミツキ（アキ（秋）、7月）のキミト（52）の1日の、ツヤヱ（53）つまり2日に、ミコトノリを出されました。

『タミワサはモト（基礎）であります。タノムのところです。タのヲシテに拠って、成り固まり、生じてゆくところ。トのヲシテの成立の根底です。

このことから、農業用水の不足は重大な問題と言えます。

カウチ（河内）のサヤマ（狭山）地方は農業用水の不足が足らない事が、タミワサの不都合の原因です。そこで、ナリワヒの為に用水池を作ることにします。ヨサミ、カリサカ、カエオリのみっつの池を掘らんとなします』

ミマキイリヒコ（崇神天皇）さんはクワマのミヤ【詳細は未詳】にミユキ（御幸）になります。

65年（アスス685年）のフツキ（7月）に、ミマナのクニから、ミツギ（上納）の使者が来ます。ミマナの使いはソナカシチと言う人物でした。

ソナカシチの、ミマナのクニからの道のりは遠いものでした。ツクシ（九州）より、北へフチノリの海を隔てています。シラギのツサ（西南）にあります。

・

ミマキ（崇神天皇）の世の、68年（アスス688年）のシハス（12月）の1日がヲナヱ（45）で、5日のネアヱ（49）の日のことでした。キミ（10代崇神天皇）はコトキレテ（息が無くなって）、もの

無断転載を禁じます。

言わず、になりました。まさに、居寝ますの如き安らかなお亡くなりでした。

翌年のネヤヱの６９年（アスス６８９年）のハツ（１月）２日に、ミカト（崇神天皇）のカミアカリ（上がり、崩御）を公けにしました。キミ（皇太子、イクメイリヒコ）や、ウチトミ（近習の臣）はモ（喪）のハ（衣服）を着て喪の謹みに入ります。トのトミが代わってマツリコトを代行します。カンナ（１０月）の１１日に、オモムロ（ご遺体）をヤマヘ（天理市柳本町、山辺道勾岡上陵）にお送りしてお納めするのでした。

ミマキイリヒコのキミ（１０代、崇神天皇、ミツカキのヨ）のご事績は、カミをアカメテ（崇めて）ヱヤミ（疾病）をタシ（直し癒し）、ミクサタカラ（三種の神器）を新たに作り直したことに、大きなものがあられましたのでした。

（C）　池田　満

ホ35　ヒホコきたる（天日槍）　スマヰ（相撲）のアヤ
（十一代イクメイリヒコ（垂仁天皇）　三分割のひとつめ）

トキ（時）は、アススの６８９年のネヤヱのハル（春）の事でした。ムツキ（１月）のツアト（１４）がツイタチ（１日）で、ヲミヱ（１５）の、つまり１月２日に。イムナ（実名）のヰソサチさんは、御歳４２にてアマツヒツギ（天皇位）を受け継がれました。イクメイリヒコのアマキミと名乗られます。即位の式の翌日には、カサリ（式典の設え）をタミ（国民）に拝ませる事、恒例の常の如しでした。

イクメのキミ（垂仁天皇、ヰソサチさん）は、生れ付きにして素直なお方でした。こころ、ホツマにしてオコリ（驕り）なき誠実さであられました。昔、夢見に、

「ミモロヱに　ヨモにナワはり
ススメおふ」ホ３４－３０　（ニニキネさんのお気持ち）

と言う、おココロでありましたことから、お世継ぎに定められたのでした。

ちなみに、お兄さんのトヨキヒコさんの夢は、

「ミモロヱに　キ（東）にむきヤタビ
ホコゆけし」ホ３４-３０

十一代イクメのキミ（垂仁天皇）の、１年（アスス６８９年）のアキ（秋）に亡き父君の遺体をお送りします。フユ（冬）にご陵にお納めしますのでした。（カンナ（１０月）の１１日に、オモムロ（ご遺体）をヤマへ（天理市柳本町、山辺道勾岡上陵）にお送りしてお納めするのでした。３４－６６）

ハハのミマキヒメは７９歳でして、ミウエキサキとして尊びます。また、オオハハ（祖母）のイカシコメ（イキシコメ）さんは１８９歳でして、尊びます。

２年（アスス６９０年）キサラキ（２月）にサホヒメさんをウチミヤ（正皇后）にお立てになりました。新ミヤコは、マキムキ（桜井市巻向）のタマキのミヤにお遷しになりました。

シハス（１２月）にサホヒメさんが、ホンツワケさんをお産みになられたのでしたが、なかなか、お言葉を出されないミコ（皇子）でした。

・

ミマナから、ソナカシチが来朝します。ミツギ（上納品）の献上と、イクメのキミの即位を祝賀する使いでした。ヲヲンキミ（イクメさん、垂仁天皇）は、ミマナのキミにと、ソナカシチに賜物を授与します。五

色に彩られたカツミネ・ニシキ（北海道産の錦織物）のアヤ（綾織物）を、モモハ（百反）の多くでした。シホノリヒコが、お供をしてノホリ（幟（のぼり）旗）を立てて送って行きまして、ミマナとのミチ（国交）は開いていったのでした。

・

十一代イクメのキミ（垂仁天皇）の、３年（アスス６９０年）のハ（１月）になりまして、シラキ（新羅）の帰化人のヒホコの子孫のモロスケをトミ（臣）に召しました。

ヒホコのミヤケモノ（土産物）の８品は、タシマ（但馬、兵庫県豊岡市出石町、出石神社）に納めておいたのでした。

８品は、以下です。

１、ハホソ
２、アシタカ
３、ウカカタマ
４、イツシ・コカタナ
５、イツシ・ホコ
６、ヒカガミ
７、クマノ・ヒモロケス
８、イテアサのタチ

さて、その、ヒホコの来歴は、ミツカキのヨ（１０代の崇神天皇）の３９年（アスス６５９年）に遡ります。（ツヌガアラシトの敦賀は、アスス６７８年）　ヒホコは、来朝してハリマ（播磨、兵庫県南西部）から、シシアワ（兵庫県宍粟市か？）に至るのでした。この時に、オオトモヌシと、ナガオイチが聞聴使に使わされて、ヒホコに問います。ヒホコは答えます。

『わたくしは、シラキ（新羅）のキミのアコ（最も継承者に近い人）です。名はアメヒホコと言います。弟のチコにクニを譲って、ヤツカレ（わたくし）はヒシリのキミ（垂仁天皇）にマツロイヌ（教えを授けてもらって帰化）したいと強く望みますのです』

オオトモヌシと、ナガオイチがこの次第をイクメのキミ（垂仁天皇）に報告しました。イクメのキミは、国内への居住を許可なさいましておっしゃいますのでした。

『ハリマのイテサムラ、また、アワチ、シシアワの所については、居住を認めます』

このことを受けて、ヒホコは、さらに願いをします。

『居住のご許可のこと有り難うございました。

さて、そうしましたら、もうちょっと諸国の各地につきまして見聞を

広めるために巡り見たいのです』

イクメのキミは、これも許可なさいますのでした。

アメヒホコは、ウチカワ（宇治川）を遡ってアワウミ（琵琶湖）に出ます。アナムラ（湖東の鏡山近郊、苗村神社、滋賀県竜王町綾戸。または、草津市穴村町の安羅神社、か？）に滞在して、さらにワカサ（若狭）を巡ってタシマ（但馬）に住まいしました。兵庫県豊岡市出石町宮内の出石神社は天日矛を祭ることで有名です。供のスエヒト（陶器職人）はハサマタニ（狭間の谷あいのことか？）にそれぞれ、定住が出来うるようになったのでした。イスシの有力者のフトミミの娘さんのマタオオを娶ったアメヒホコは、モロスケを儲けます。モロスケの子供がヒナラギです。ヒナラギはキヨヒコを儲けます。そしてキヨヒコはタシマモリを儲けるのでした。（タシマモリは、ヤマトタケ（日本武尊）の妻のヲトタチハナヒメのお父さんです）

・

十一代イクメのキミ（垂仁天皇）の、４年（アスス６９２年）のことでした。サホヒコの反乱が起きます。サホヒコは９代開化天皇の孫のタニハミチウシの弟でした。妹にはサホヒメがいまして、サホヒメは１１代のイクメのキミ（垂仁天皇）のミヤに入内していたのでした。

さて、４年のナツキ（９月）、ツウヱ（２３）のハ（１日）のヲナヱ（４５）、つまり２３日でした。妹でキサキのサホヒメに、兄のサホヒコが問うのでした。

『兄とヲ（夫）と、どちらがよりあついか？（信頼できるか？）』

何の気なしにこう問われたサホヒメさんは、つい、

『お兄さんのほうでしょうね』

と、お追従かねがね言ったのでした。

この言葉に、サホヒコはかぶせての籠絡に迫っていくのでした。アツラウと言う古い言葉に表れています。当て込ませると言った感じが、現代風のそんな雰囲気でしょうか？

兄のサホヒコは、アツラウのです。

『ナンチ（あなた・妹）は、イロ（美しさ）で仕えて寵愛を得ているのであるが、やがては、イロもオトロヒテ（衰えて）くるのは目に見えています。その時は、メクミ（寵愛）は去りますよ。

兄とのきずなは、そんな脆（もろ）いモノではないです。長く久しくのつながりです。

願わくは、思うのです、わたくしと、あなたと、ふたりして御代を治めて踏まば、より長き安眠の枕を得る事が出来得ましょう。

この、目標を手にしての実現のため、一肌脱いで頑張ってみてくださ

い。それには、あなたなら、キミ（垂仁天皇）を容易く殺すことが出来得ます。おやりになって下さい。わたくしの為でもあり、あなたの為でもあります』

ヒホカタナ（細い小刀）を、兄のサホヒコが渡すのでした。サホヒメは、兄の表情を見て、イナ（否・拒否）と言っても決して聞き入れることがないと悟りました。事の成行きにヒホカタナを受け取ってしまったサホヒメさんは、ナカコ（心の本心）はワナナキますのでした。

さて、ヒホカタナ、どうともしようにも袖の内に入れての日々が続きますうちにセミナツキ（旧暦6月）になりました。ハツヒ（6月1日）にクメのタカミヤ（久米御縣神社か？　、橿原市久米町）に、イクメのキミがミユキ（行幸）あらせられたのでした。サホヒメはイクメのキミを膝枕に添えます。さて、キサキのサホヒメは、兄からのアツラヒの事が胸に迫ってきます。今この時こそが、その時だ。

サホヒメは、この時に涙がつたって来てポタり、ポタポタと、キミ（垂仁天皇）の顔に滴（したた）ります。

キミは、夢覚めて、問うのでした。

『イロオロチ（綺麗な蛇）が首に纏（まと）わりつくのです。サホヒメのアメ（雨）のようなものが、オモテ（顔）を濡（ぬ）らすのは何かのサガ（禍い）なのでしょうか?』

この問いに、キサキのサホヒメは隠し得ないのでした。伏しまして、マロビツツ（うずくまりつつ）申し上げるのでありました。

『キミ（垂仁天皇）のメクミも背き得ず、兄のことがあります。さて、兄の陰謀を告発すれば兄を滅ぼすことになります。

兄の企てを告げざる時は、国家の転覆をももたらす異常時になります。どっちに転んでも、どうにも、為し行きようが有るわけでは御座いませんのです。身動きの取れなくなって怖れ悲しみのチのナンタ（涙）です。

兄のサホヒコのアツラヱの陰謀は、このところだったのでした。　キミの昼寝の膝枕のことでした。

このような事が、また、将来にも起き得るとしたら、ひょっとしての事で実際に行われてしまう場合もあり得るのかもしれません。このように思い考えますと涙がひたひたと滴（したた）るので御座いました。キミのお顔に潤せるものは、この事でございます。

また、おん(御)お夢のオロチ（小蛇）は、このヒホカタナ（細い小刀）の事で御座いましょう』

ヒホカタナを見たイクメのキミ（垂仁天皇）は、クーデターに対応なさいます。チカガタ（近郊）にあるヤツナタ（のちにオオトモ・タケヒ）

を召して、サホヒコを討たしめられたのでした。すでに、用意万端のサホヒコはイナギ（城砦）を作って強固に守りを固めていました。ヤツナタも攻めあぐねています。サホヒメは、悲しんで言うのでした。

『我たとひ、ヨ（世）にあるとても、シム（為すところの力、および、血縁の人）枯れて何か面白いこともあり得ましょうか』

サホヒメは、ミコ（皇子）のホンツワケ（アスス６９０年１２月の誕生、満２歳６か月）を抱（いだ）いてイナギに入ってゆくのでした。イクメのキミ（垂仁天皇）はミコトノリをおっしゃいます。

『キサキと、ミコを出すべし』

ですが、サホヒコは応じませんでした。ヤツナタ（のちのタケヒ）は火攻めに取り掛かります。火がイナギを包みゆく時に、ミコのホンツワケを抱かせて外に出します。そして、イクメのキミに言うのでした。

『兄のツミ（罪）を逃れようとして、イナギに入ったのでしたが、わたくしも共にツミのあることを悟って知りました。たとひ、ここにマカレト（死んでしまっても）ミメクミのことは決して忘れることは御座いません。

後のキサキのお定めの事に、タニハミチウシ（サホヒメの兄）の娘をと、願い上げます』

キミが、サホヒメの遺言をお聞きになりまして、火の穂は大きく上がりシロ（イナギ）は崩れたのでした。人々は逃げ去って、サホヒコもサホヒメも亡くなったのでした。

イクメのキミは、ヤツナタをお褒めになって新たな讃(たたえ)名のタケヒムケヒコを授けられました。

・

十一代イクメのキミ（垂仁天皇）の、７年（アスス６９５年）フツキ（７月）の１日に、コモツミの子のツツキ・タルネの娘さんのカハイ・ツキヒメをキサキに立てられました。妹の、カクヤヒメもウチメの位で入内になりました。コトホギ（お祝い）に、初めてのタナハタのカミマツリをお祝いなされるのでした。（綴喜郡、今の京阪奈丘陵のあたり、城陽市に水主神社、樺井月神社）

・

さて、力比べの事が興ります。のちに言う相撲です。あるトミが、キミに告げます。

『タエマ（二上山東麓、葛城市当麻、当麻・今に言う「たいまの里」です）のクエハヤが大力（おおちから）で、力比べをしたいと、常に言っています。チカネ（千金？）を伸ばす事が出来。ツノ（角）を割く事が出来ます。カナユミ（金属弓）を作って、ツマにも常に床語りで言う

無断転載を禁じます。

のです。この、カナユミを踏み張るわがオオチカラをヨ（世）に比べたいものだ。力比べをせずにして、このまま、亡くなってしまうのは如何にも辛い』

その、クエハヤの嘆きぶりは、十一代イクメのキミ（垂仁天皇）にまで聞こえてきたのでした。イクメのキミは、おっしゃいます。

『それならば、クエハヤに比べる力持ちは何処かにあろうものであるか？』

トミは、答えます。

『イツモ（出雲）にノミのスクネが居ます』

ナガオイチに問はしめましたところ、ノミのスクネも大喜びで力比べをしたいと言うのでした。そして、ノミのスクネはミヤコに上って来ました。イクメのキミも、喜ばれるのでして、早速に明日にでも力比べをすればどうか？　とミコトノリされるのでした。

チカラ・クラフル（力比べ）のカミのノリ（当時でのさらに昔にも、前例があったのでしょう。スマヰのサト（桜井市穴師、相撲神社）にハニワ（土俵）を作って、カミのノリ（古い時代のやり方）に設えます。タエマのクエハヤは、キ（東）から上ります。ノミのスクネはツ（西）から上ります。さて、取り組みが始まりますと、ノミが強くて圧倒してゆきました。終にはクエハヤのワキ（脇）と腰も踏み折って勝負がつきました。

イクメのキミは、ウチハ（団扇・うちわ）を上げてトヨマセ（どよます・喝采を上げる）ました。見物のトミ達も勝利を讃えて喝采を送ります。しかしクエハヤは、ここに絶命したのでした。力比べでのミマカリ（亡くなり）は、本人のたっての希望でもあったのでした。

クエハヤのカナユミは、ノミのスクネが貰い受けることになりました。タエマ（当麻）のクニもノミが受け継ぎます。クエハヤの家屋敷については、クエハヤのツマが相続しました。継ぎを為したるノミのスクネはユミトリの栄誉をも得るのでした。

（C）　池田　満